

始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

特100

636

現代白科文庫
搜概叢書
第十卷

加藤朝鳥編譯

ピネロ作
ポオラ
ロスタン作
シヤントクル



持100
636

百科文庫發刊の辭

社會の各方面に互りて、名高い書物や面白い作品を小冊子として提供する。

現代知名の方々に依頼して、なる可く平易簡易に書いて廉價にして體裁よく製本し度い。

種目は、先づ哲學叢書、宗教叢書、教育、科學、文藝思潮、政治經濟及び梗概、偉人、驚異、問題叢書等の十餘種に分ち、更に各種に互成る可く代表的のものを選び續々發刊する。

大方の諸氏、幸に愛讀の榮を給へ。

大正三年九月

日月社白

大正頂
3. 11. 11
内交

梗概叢書の發刊に際して

「現代百科文庫」中の一科として、名著の梗概を出版するに至つた、數ある理由の中に、重なる利益として左の四つを挙げます。

一、難解な意味、晦澁な文章を、平易簡明に縮寫して、誰にでも分りやすくする事、

二、僅かの金で手に入れる事の出來得る事、

三、忙がしい中の短い時間でも、讀了出來る事、

四、全文を研究的に讀む人も梗概より讀めば非常に入り易き事、

世の中が益々忙がしくなるに隨つて、日に生活難の聲が高くなりつゝある時、前記の四つの利益は文明普及の上に大に必要な事と存じます。

名著の種類は、和漢洋に亘り、文學、哲學、宗教、科學、歴史等の百科を通じて、あらゆる世界の名著を網羅して、完全なる叢書を完成したいと思つて居ます。

ホ
オ
ラ

ビ
ネ
ロ
作
加藤朝鳥譯編

ポ オ ラ

登場人物

妻 倫敦の富豪
 娘 妻
 友 人
 全 友 人
 全 友 人
 全 友 人
 大 尉
 伯 爵
 同 夫 人
 給 仕
 モールズ
 オーレイド夫人
 サイ、デヨーヂ、オーレイド
 ヒュー、アルデール
 コーテリオン夫人
 ゴルドン、ヂエーン(醫師)
 フランク、ミスキス
 エリヤン
 カーレイ、ドラムール
 オープレイ、タンカレイ
 ポオラ

内 容

シヤントクレール
 ポ
 オ
 ラ
 ビネロ作
 ロスタン作

第一節

英國アルバニー富豪オーブレイ、タンカレイの數奇を凝らした室内の光景である。右手に開戸と其の端に寢室に通ずる小さい戸がある、室内には主人タンカレイと友人のフランク、ミスキスとゴルドン。ヂェーンとが今食事を済まして是れから果物と珈琲を食べやうとして居るところ。三人は頻りと來る筈のカーレイの見えないので氣を揉むで居る。オーブレイは給仕モールの持つて來た葉巻を友人にも勸めて燻し乍ら、

オーブ「カーレイ君にも今夜是非列席して戴く筈であつたが、既う來さうもない。それで仕方がないからお二人に聽いて戴かう。實は君達に御目にかゝるのは今夜が最後だ。」

二人「エエ!?」と驚く、

オーブ「君達も御存じだらう、私が五六年前にサーレイに家を持つて居た事を。先妻が死んでから人に貸して置いたが今度其處へ引き越さうと思ひ立つたので」

ミスキス「たつた一人田舎に？」

オーブ「否、一人じゃあない、實は今度結婚爲やうと思ふので、それも明日と迫つて居る。」

ヂェーン「明日？結婚？」

ミスキス「そ、そ、そりやあ驚いた。否、そりやあ御日出度い事です。」

オーブ「まあ聽いて呉れ給へ、普通世の中の人達は結婚して新婚旅行から歸つて來て、理想の新家庭を持つて、扱て一層今迄の友人と交情を深くしやうとするが、それはどうも失望に終ららしい、そこで僕の結婚は決して社會を満足させる様な普通の結婚ではないのだ。勿論君達の奥さんとも違ふ、是れから妻の行く道を一緒に行かればならないと云ふわけだ。」

ミスキス「まあお互に別れる様な話はよさうではないか。」

オーブ「今夜の此の愉快な一節を終つて再び新家庭で御目にかゝる時を待たう。ね、兩君。」

と云ひ乍ら兩友の手を把る。

ミスキス「まあ待つて呉れ給へ、一體其の妻君の御名前は何と云ふのだ。」

オーブ「それは聞かずに置いて呉れ給へ、それは第二節としてね。」

三人は祝盃を擧げる、そしてオーブレイは二人に斷つてライチング卓で手紙を書きだした。其の間二人の友人は頻りとオーブレイの結婚問題を氣にかけて語つて居る。其處へ給仕が這入つて來てカーレイ、ドラムールが來た事を告げると間もなく背の低い好男子が這入つて來る。

ドラム「あゝ、今日程馬鹿げた目にあつた事はないよ。」と云ひ乍ら立つて来たオーブレイと握手する、兩友とも握手して、

ドラム「何卒が僕が説明する迄何にも云つて呉れ給ふな。」

ミスキス「大相弱つて居る様だね。」

ヂェーン「まあ聞き給へ、實はね、八時十五分前にすつかり仕度をして十分間に此方のヂェーンに來やうと想つて居る處へさ、僕の母親の親友のオーレイドの老婦人の身の上で大事が逸つたから直ぐ來て呉れと云ふ手紙なんだ、其處で仕方がないブルートン街の貧民窟の借家に居る其の老婦人を訪れたと思ひ給へ。で諸君も知つて居る彼のヂョージ、オーレイドだね、彼れは既う故人になつたよ。と云ふとホラ驚くだらうが、或意味に於て死んだのだ。彼れはマーベル、ハーベルと結婚した。」

ミスキス「困つた叔父さんだなあ。」

ヂェーン「一體其の女は何處素性の女だね？」

ドラム「そりやあ天變な代物さ、元は女優だが警察や離婚裁判の告知書にも名を出されて居る、それはくしたたか者だがね、其の美しい事たら、實に無類とびきりと云ふわけさ。が精神の方に於ては全く零、只感情に依つて左右されて居る女だ。芳紀正に二十五歳と云

ふ女盛り。是れがヂョージ、オーレイド夫人さ」

オーブ「然し吾々は其の女に就いては何にも知らないのだ。色男のドラムール君でさへそれ以上は知つて居ないんだからな。僕は失敬して手紙を書かう。」

オーブレイ再び卓に向ふ、

ドラム「可憫相なのは其の老母さ。彼れは既う一生歸らないと云ふのだからな。彼れは既う永久に吾々の許へは歸つて來まい、彼れは人間の泳いで居る世の中の社會的死海に永久に陥られて了つたのだ。」

ミスキス「一体君は今頃何處を往復して居たのだ。」

ドラム「死海の岩頭に立つて親友の來るのを待つて居たのだ。」

オーブレイ此の間沈鬱な顔をして耳をそつとドラムールの話に傾けて居たが、逐々堪へかけて手紙の書きかけを持つて立ち上つた。

オーブ「僕は一寸失敬して、次の室で手紙を書いてしまふ。で先程の話をカーレー君にして呉れ給へ。」と兩友に向つて云つて出て行く。ドラムール其の跡を追ひ乍ら自分のおしゃべりを謝す。戸は閉められて了ふ。

ヂェーン「カーレー君、結婚の噂があるよ。僕等の友人の中で……」

ドラマ「ム、彼のアリス、トリング嬢とユーゲント、ワーリンダーの話だらう。」

ヂエーン「否々、中々、明日、彼のオーブレイ君の……」

ドラマ「エエ、オーブレイ？おい戯談はい、可限に止し給へ。」

ミスキス「嘘じやあないよ。眞當だよ。」

ドラマ「それから相手は誰なのだ。」

ヂエーン「未だそれは知らないがね、僕等は今夜其の話を承るべく來たわけさ、その又結婚の理論が友情悲觀説なんだ、何でも僕等と永久に別れる考へらしいて。」

ドラマ「オーブレイは今年四十二だよ、丁度厄年じゃあないか。」

ドラマールは心配げに爐の方に歩み寄り乍ら、

ドラマ「今夜君達は僕だけを後に残してくれないか。少し考へがあるから。」

ヂエーン「宜いとも」

ドラマ「兎角男の二度目の結婚には間違があり安いからな。」

ヂエーン「オーブレイ君は以前の細君とは大變面白くなかつた相じやあないか。」

ドラマ「さう。何でも結婚したのは細君が十八の時だつた。大理石に黒天鷲絨の服を着せた様な冷い厭な感じを起させる女だつたよ。然しオーブレイは女神の様に崇拜し、愛して

居たが、細君の方では指一本も握らせもしない様な情愛のない女だつた、それで遂々外國へ連れ出して氣嫌をさらうとしたが、それも非常な失望に終つたらしい、種々してオーレイ君は細君が自分から折りあつて來るだらうと氣永に待つて居たんだれ、其麼風だつたが不思議にも一人の娘が出來た。」

ミスキス「子供が出來たらよくなつたんだらうね。」

ドラマ「どうして、却つて悪くなつた位だ。と云ふのは細君は羅馬^{カトリック}加特力教の信者なので熱心に良人をも同宗教に入れ度いと思つて努めたが成功しない。仕方がないから非常手段で娘を遂々アイルランドの尼寺に打ち込こでしまつた。それから程なく細君は熱病で死んでしまつた。恐らく一生彼の細君は情熱を持つて人に對しなかつたのだらう。」

ヂエーン「其の娘は未だ生きて居るのかい。」

ドラマ「君の云ふ意味で今アルマーのローレットと云ふ尼寺に生きて居る。今年十九才だ。細君は娘には必ず立派に一生宗敎生活をさせると云ふ條件で死んだ相だ。それで今度のお別れに娘に會ひに行つた相だ。其の時娘は何さなく若い盛りを尼寺に暮すのが厭になつて俗世間に出て來たい風だつたのだ。それを見て、歸つて來ても僕に其の問題で相談して鎮りと煩悶して居た。」

此の時オーブレイが這入つて来る、

ドラム「今君の噂をして居たところさ、ハハ、」

ミスキスは爐の處に、ドラムールは椅子にオーブレイはミスキスとヂエーンとの間に坐を召める。

オーブ「カーレイ君、君怒ちやあ居ないかい？」

ドラム「怒る！怒るとも。我輩が是れから親しくして貰はなくつちやあならならぬ其の婦人の名さへ秘して居るじやないか……」

オーブ「まあ其の話は止さうじやないか。」

ミスキスとヂエーンは同時に歸り住宅をする。

オーブ「まあ、未だ御兩君ともいいじやあないか。」

止めるのを強いて別れ去る。オーブレイは二人を送つて出て行つたが間もなく歸つて来る。ドラムールが何事か考へて居る様子を見て氣まり悪る相に、

オーブ「君未だ歸りやあしないだらうね。」

ドラム「歸りやあしないよ。」

オーブレイは強いて笑顔を作つて

オーブ「ハハ、僕はね、今夜程君に對して極りの悪い思ひをした事はないよ。」

ドラム「何故だい？」

オーブ「何故と云ふわけもないがね。」

ドラム「ああ、判つたよ。世間の人はね、賤しい女と結婚でもする者に向つてはね、何かと陰口を叩くものだ。然し僕は左様云ふ慘酷な眞似はしたくないと思ふね。」

オーブ「君は嘘かし僕を恨むで居るだらうね。然し是れには種々事情がある事で、今更拒絶する事も出来ない様な……まあ時が來れば判る事だから……」

オーブレイの顔を見詰めて居たドラムールは聽て帽子と外套とを取つて歸り住宅をする。

オーブ「君、僕が友情を捨てたと思ふのか、まあ歸るのは待つて呉れ給へ、話すから、君、まあ來給へ、その、實は僕が結婚しやうとする婦人は……その……ヂャーマン夫人と呼ばれた女なので……」

二人は暫く無言で居たが、

ドラム「ヂャーマン夫人！そりやあ眞當かれ？」

と云ひ乍ら爐に近づき暖爐の蓋に倚りかゝつて、斯う叫むだ。

オーブ「是れ迄打ち開けた以上は何事も君に話すよ。君は彼のヂャーマン夫人を知つて居るのかい。」

ドラム「僕は一寸其の知つて居るが……それが仕うしたい？」

オーブ「彼の夫人に就いて君の知つて居る事は皆話して呉れ給へ。」

ドラム「實は二三年前、ハムブルグで初めて會つた。」

オーブ「其の時はヂャーマン夫人として會つたの!?」

ドラム「ダートリー夫人としてだ。」

オーブ「而して君は倫敦のアドルフ街で會つたんだらう……」

ドラム「昨年しほの或日の事だ、觀劇しほの歸りでね、或る人の晚餐會に招かれたんだ。」

オーブ「彼の無妻者のセリン、エクルスト君のだらう、而して其の時エクルスト君が或る

夫人から大變親切にされた事も君は知つて居る筈だ。其の婦人が即ちダートリー夫人だ、

又君は地中海の快走船ヨットの競争の時君はミッセヂャーマンと一緒に居たんだらう。」

ドラム「左様、左様、當日の女主人公だつたからね。」

オーブ「ビーター君とはよく知つて居るのかね。」

ドラム「知つて居るとも」

オーブ「ああ、それで判つた。」

ドラム「我輩も君の話で判つたよ。」

オーブ「で、僕は實は女の手にかゝつてつまらない眞似をしたと思はれ度くないので今迄何も話さなかつたのだ。其のミッセス、ヂャーマンと云ふのは法律上ではミス、レイとなつて居るのだ。勿論彼女は此の中から惡魔の様に云はれて居る。然し左様云ふ虐待を受けて居る幾十人の女の中にも立派な徳を持つて居る者もあるのだ。それを人々は認めないで唯々冷遇するんだね。君等など平凡世界のみ見馴れて居るんだから左様した女の世界は判るまい。」

ドラム「我輩の住む世界が其の平凡世界なのだ。」

オーブ「僕の云ふのは此の都會の事を云ふのだ。」

ドラム「それなら君は、此の都會を捨て様と覺悟して居るんだね。」

オーブ「左様。僕は此の慘酷な華美なパールマールを捨て、サーレイの山の中に行つて堅實な生活をしたいのだ。そりや僕は臆病者と云はれるかも知らんが、僕は僕自身を自由にする權利を持つて居る。ほんとの一人者だからね、君だつて何も僕のする事を干渉する權利もあるまい。又僕だつて君に向つて今度の結婚に同情して呉れとは云はないよ。」

ドラム「然し、君は其のチャーマン夫人、否、レイ嬢に對して義侠を街ふのではあるまいか。」

オーブ「君は嘗て、斯う云ふ事を云ふた事があるれ、男子四十才近所になると、禁欲主義か、なければサターの様な淫亂になるか何れかだと、然し僕は今のところ何れでもない、チャーマン夫人に對しては公平な愛情を持つて居るつもりだ。未だ眞當の愛を知らない彼女を救つて幸福にしてやらうと思つて居るのだれ。君、今後幾年かの後には必ず耻しくないだけになつて御目にかゝるから。」

ドラム「ああ、何卒、左様して呉れ給へ。」と二人は握手する。

オーブ「餘り僕は興奮して居て失敬な事を云つたかも知れんが、まあ赦して呉れ給へ。」

ドラム「僕にも似合はない、今日は理論もやつたが、まあ何事も忘れて君等の幸福を祈らう。」

此の時給仕モールスが這入つて来てチャーマン夫人の來たのを告げる。オーブレイは稍狼狽する。ドラムールは氣がついた様に歸り住宅をする。

ドラム「れ、君、僕は芝居の観客なのだ、だから君達が芝居をし居る間は僕の爲めに上等席をとつて置いて呉れ給へ。而して其の芝居も悪人亡び善人榮ゆ目出度し〜で終るのを。」

僕は喜ぶのだ。」

オーブ「勿論さ。僕もそれを望む。」

ドラム「ハハ、左様なら、まういいよ。」

オーブレイは友人を送つて出て行くと一方の戸口よりモールス手紙を持つて入り來り卓の上に置く。オーブレイ入り來る。給仕さる。

オオプ「ポオラー、ポラー」と呼ぶ、と二十六七な奇麗な無邪氣な女が這入つて來て突然

オーブ「今頃何故來た？」

ポオラ「來ちあいけない。」

オーブ「既う十一時過ぎじゃないか。」

ポオラ「知つてよ。」と云ひ乍ら四邊を見廻して、

ポオラ「あら御馳走があるのれ。」

オーブ「友達が三人來て居たのだ。」

ポオラ食卓に向つて、

ポオラ「私、眞當にお腹が空いたのよ、實はれ私末だ晩飯をしないのよ。」

オーブ「可憫相に如何したの。」
 ポオラ「意地の悪い料理人がね、歸つてしまつたの、だから仕方がなくつてね、女中に呼びにやらしたのよ、それから仕うなつたと思召して？それで夜此の着物の儘食堂で茫然待つて居たのよ、すると何時の間にか眠つて了つたの。而してそれは、奇麗な宴會の夢を見たのよ。」

オーブレイは果物を女に勧める、女は其れを食べ乍ら、

ポオラ「私と貴郎とは其の夜の宴會の主人公なの。而して二人は結婚して五年目、」

オーブ「五年目？」と云ひ乍らオーブレイはポオラの手に接吻する。

ポオラ「ええ、五年目なのよ。而して二人はね食卓の一番端に向ひ相つて坐つて居るの、一寸目を見合せ乍ら……而して私等の兩側にはそれは、美しい飾物があつてね、而してお客様つたら種々な方が集つて居るのよ。僅五年しきやあ經たないのに、私の元の身分を誰一人口に出す者もないの。」

オーブ「永い話だね。既う夜が明けるよ。」

ポオラ「まあ聞いて頂戴な。ね、左様した夢を見て居るうちに食堂のストーヴの火が消えて了つて居るんでせう、仕方がないから私慄えながら目を醒まして二階へ馳け上つてホラ

斯う云ふ手紙を書いたのよ。」と云ひ乍らポケットから一通の量張つた手紙を出して、
 ポオラ「これはね、私の今迄の事がすつかり書いてあるのよ。でも皆貴郎の知つ居てらつしやる事なの。又人から聞いていらつしやる事なの。然しね、若し御存しない事があるかと思つて斯うして貴郎にお見せしやうと……」

オーブ「ポオラ！お前は何故今夜に限つて其廢話をするのだ？」

ポオラ「まあ何でもいから受取つて置いて下さい。私が歸つた後で幾度も、讀むでね、厭になつたら直ぐ使をよこして下さい。」

オーブ「お前は私の心を知らないから其廢事を云ふのだ。」

ポオラ「私ばね、全く貴郎を愛して居ますから後で後悔させる様な結婚をおさせ申し度くないと思つて……」

オーブ「ああ、既う過ぎ去つた事は云つて呉れるな、皆忘れて了まおふ。其廢不愉快な事を何も思ひ出さなくつともいい、此の手紙も焼いて了まおふ。」

ポオラは一寸肩を聳して

ポオラ「それは貴郎の御勝手だわ。」

オーブレイは爐の畔に居つて手紙を爐中に投げ込む、

ポオラそれを見て冷然と立ち上る。

ポオラ「私既う歸りませう。」

オーブ「お前仕うしたのだ。」

ポオラ「私は仕うしても貴郎と結婚せずには居られないんですよ。若し貴郎が他の男と同じ様に私を捨ててでもしたら、其時は私は生きちやあ居ません。而して此の後若し私の身上に變つた事でも出来なら……と今から覺悟はちやんとして居ます。」

オーブ「其麼事は決して無いよ。」

ポオラ「今じゃあないの、此の後……ああ既う其麼事は止めませう。ね、貴郎、眞當に私を可愛がつて幸福にして下さいね、若し今度不幸な目にでもあつたら、私は此の儘じゃあ居ないから。ああ大變遅くなつた。おや私の外套？」と云 乍ら次の室に出て行く、オーブレイは其の後姿を見送つて不圖思ひ付いた様に先程の手紙を見其の中から一通を抜き取り、

オーブ「おお、エリヤン、何を云つて来たのか知らん」と封押し切つて讀む。

「此の頃の私の心の上に變化が參りまして矢鱈御父様が戀しくなりました。是れも亡き母様の御魂が左様思はせるのではないかと思ひます。一日も早く此の淋しい〜尼寺を捨て

御父様の許に參つて孤獨な御心をお慰め申し度いと存じます。此の希望を何卒御許し下さいまし」斯う讀み終つた處へポオラが美しい外套を着て這入つて来る。

ポオラ「良い外套でせう、あら手紙を讀むのは止して頂戴。さあ、私を支關迄連れてつて頂戴な。」

ポオラオーブレイの手に纏る、

ポオラ「明日は私、眞當に嬉しいわ。」
兩人去る。

第二節

開いた窓からは朝日が射し入つて初春の廣々とした田舎の景色が一目に見渡さる。室内は華かに裝飾されて正面に二重戸あり、左の方にも開き戸がある。此處はサーレイのウイロミヤ附近である。今やオーブレイとポオラは朝飯の卓に向つて居る、オーブレイは黙つて手紙を見て居たが、手紙を置くと窓の方を視て、

オーブ「好い天氣だね。全く春になつて来た。してエリヤンは仕うしたんだらう。」

ポオラ「又エリヤンですか。エリヤンはね、二時間も前に御飯を済ませて愛犬と共に運動に出かけたんですって。」

オーブ「風邪を引きやあしないか知らん。」

ポオラ「私が昨夜上靴の儘で森の處迄散歩に出かけたけれど、矢張心配して下すって？」

オーブ「心配したとも、お前は僕に氣を揉ましては喜んで居るんだね。」

ポオラ「まあ濟まなかつたわね。」とオーブレイの傍に行つて接吻する。而して傍の手紙に目をつけて、

ポオラ「おや、カーレイさんから御手紙ね。」

オーブ「カーレイ君は直ぐ近所に宿つて居るんだよ。ほら彼のコーテリオン夫人の家に來て居るんだ。」

ポオラ「ああ、彼の夫人！何故訪れて居らつしやらないでせう。判つたわ。判つたわ。彼のコーテリオン夫人は貴郎の先の奥さんのお友達で、私との結婚に大變反對なすつたんですってね。四十六ですってね。丁度女の厭がられる齡ね。」

オーブ「カーレイ君は今朝來る筈だよ。而したら仕うだ。少し家に居る様に云はうか。」

ポオラ「貴郎の御朋友だものね。左様したら貴郎は無嬉しいでせう……けれ私とは何とも

ないわ。」

オーブ「倫敦の話を聞けるよ。お前の大好きな。」

ポオラ「倫敦……倫敦と天國とは私にとつては何らが近いでせう！ああ！眞當に厭になつてしまつた！」

オーブレイは數通の手紙を集めて。ポオラの肩に凭りかゝり乍ら、

オーブ「此の我儘者、仕うすればいいの。」

ポオラ「何にもしなくつてもいいのです。貴郎は私と結婚して下さつたんですもの。」

オーブレイは沈みがちに手紙をライティングテーブル卓に置く時にポオラがオーレイド夫人に出さうと書いたらしい手紙を認む、

オーブ「お前、未だオーレイド夫人と文通して居るのか。」

ポオラ「エエ、マーベルは私の古い朋友ですもの、文通しちやあ悪い？だつて彼の女は昔とはすつかり變つて今じやあ立派なオーレイド夫人となつて居るんですもの。決してオーブレイ夫人と比べて劣りはしませんよ。」

ポオラ「否、あんな女と交るには及ばない。」と云ひ乍ら手紙を投げつけて新聞紙を取り擧ぐ、

ポオラ「でも此の手紙の中に何か書いてあるか貴郎知つて居て？私は唯夫婦に遊びにいらつしやいと云つてやつたばかりですよ。それにデヨーヂさんはカーレイさんのお友達でせう丁度いいじゃありませんか。」

オーブレイは失望して新聞紙を下に落したが

オーブ「ハハ、あんな男など誰が相手にするものか。」

ポオラ「何でも構いませんよ。私は、私は既うちつとも心棒が出来やあせん。淋しいつたら全く死に相だわ。」と云ひ乍ら花瓶の花を取つたりむしつたり並べて見たり、胸に刺して見たりして、

ポオラ「一體、何が面白いんだらう。毎日毎日同じ様な事ばかりして、まあ思つても御覽なさい。朝は御者と二人で買物に行く一日中相手は貴郎とエリヤンばかり、小説を讀まなければ馬車で遊びに出る。又三人で夕飯を食べる、それが濟めば貴郎を相手に玉突をする。エリヤンは暗い處で聖書を讀む、聽て私が倦きて欠伸をする、貴郎もする、エリヤンは溜息をする。三人は立ち上つて、お寝みなさい！ああ！厭になつちまう。」

オーブ「左様、左様、其の通りだ。然し今に賑かになるよ。」

ポオラ「それが間違いですよ。其の集つて来るつて云ふのは此の村の人達ですが、それと

もコーテリオンさん？彼の私大嫌の牧師さん夫婦？駄目、私等は今に仙人見たいになつて、世の中から遠去かつて、齡はとつて行く血の氣は乏くなる。果ては干乾びて了つてああ、厭な事だわ。都會が戀しい、而して淨氣な眞似をして居た方が餘程よかつた。斯うなつたのも自分の心柄だけれど、私が家を造つて貴郎に来て頂いた方が宜かつたのだ。一體結婚した女は、結婚した女の中へ出て、夫人の中の夫人と立てられるところに女の^{プライト}があるんですものね、ね、貴郎、左様じゃあないこと。」と云つてオーブレイを見ると悄然と首垂れて居るので、

ポオラ「貴郎、貴郎、仕うなすつて？」

オーブレイ赤い顔を擧げると其處へ質素な運動服を着た十九歳位な娘しとやかに這入つて來た。

オーブ「エリヤン！」

エリヤン「お父様、御早う御座ります。ポオラさん御早う。」

ポオラエリヤンに接吻する、エリヤンは一寸厭がる風、ポオラがエリヤンに挨拶してピヤノに向ふと親と娘は心からの情をこめて接吻す。此の時二人の給仕が這入つて來て食卓を持ち去る。

オーブ「藪の中を歩いて来たれ？大變なエニシダだよ。」と裾の邊に着いたエニシダを拂つてやる。

エリヤン「今ね、ロヴァー(愛犬)を連れてエニシダの中を馳け廻つて来たんですよ。ですからロヴァーはね、足に刺を立てたんですよ。今お二階へ毛拔を取りに来たところ」

オーブ「エリヤン、今ね、ポオラは大變氣嫌が悪いんだよ。」

エリヤン「それならね、今ロヴァーを見てやつてから散歩にお誘ひするわ。」

オーブ「ああ、左様してお呉れ。」

エリヤンが出て行くと、ポオラは樂器の手を止めて、

ポオラ「今何をエリヤンと内證話して居たの。」

ポオラ「今に、エリヤンが来てお前を散歩に誘ふと云つて居るよ。」

ポオラ立ち上つて歩き乍ら、

ポオラ「貴郎は餘程エリヤンが可愛と見えるのね。目の色から變るんですよ。」

オーブ「何をお前は詰らん事を云ふのだ。可愛相にエリヤンは茲より他に居る家はないんじやあないか。」

ポオラ「ね、ね、可愛にも二種ありますよ。天女のように尊んで愛して居ると唯貴郎が

を愛して居る様な尊敬のない愛と。」

オーブ「それはね御前は自分が言ふ事を實行しないからだ。」

ポオラ「エリヤンはちつとも私に昵まないのね。まるで大理石見たいわ、エリヤンが天女なら私だつて天女よ、唯結婚したばかりなもの而して貴郎、エリヤンが私を愛する様にして下さい。私を愛するのはエリヤンの義務だと思はせて下さい、私の様な女がエリヤンの様な立派な女に愛されたら什麼に幸福でせう。貴郎だつて左様でせう。」

オーブ「今になるよ。既う少しの心捧だ。而してオーレイド夫人に出す手紙など破つてしまふようになるよ。」

ポオラ「ええ、左様なつたら何でも……」と云つてオーブレイの手に接吻する。

オーブ「エリオンと彼のオーレイド夫人と並べて御覽、全く雪と墨位に違ふから。」

ポオラは何思つたか急に背を向けて、

ポオラ「貴郎は矢張エリヤンの事より他思はないのだ。エリヤン、エリヤン」

エリヤン入り来る。

エリヤン「ポオラさん。お呼びになつて？」

オーブレイは一方に向いた儘出て行く、

エリヤン「おや御父様は何か怒つて、いらつして？」

ポオラ「私が貴女の事でお父様を苛めたの、」

エリヤン「一體、貴女は私を付うなさうとするのです、私に此の家を出て行けと仰しやるの。」

ポオラ「まあ此處へいらつしやい。ね、貴女が私を愛してさへ呉れたら其れでいいの、」

エリヤンは無邪氣に近づいて來たが、

エリヤン「それは無理ですわ、今急につて仰しやつたつて、御父様をさへ先日迄は愛さなかつたんですもの。」

ポオラ「貴女は毎晩お母様の夢を見るんでせう。」

エリヤン「見ますとも、貴女だつて左様でせう。お母様のお亡くなりになつてからはお母様は常も自分を守つて下さると思はれるんでせう。」

ポオラ「だから私を愛する事が出來ないんでせう。」

エリヤン「左様ですとも。」

ポオラ「それはね、晝の間私の事を思つて愛して居て下さつたら決して亡くなつた母様の事など夢に見るものじゃありませんよ、ね、エリヤン。私を愛して下さい。眞當の母と思

つて、私はね、今迄種々の不幸にあつてそれは變な女になつて居るけれど、貴女に愛されたら辻塵に嬉しいでせう。ね、私には子供は無し、全く心細いんですよ。ね、せめて心からの接吻をして下さい。」

エリヤンはポオラの接吻を逃れて長椅子の上に伏沈む、ポオラは此の様を見て怒り出した。

ポオラ「何故其麼眞似をするのです。エリヤン私に耻をかゝすんですか。」

此の時給仕入り來る。

給仕「ドラムール様がお見えになりました。」

ドラムール乗馬服で這入つて來る。給仕去る。

ドラム「やあ、御氣嫌宜う。」と云ひ乍ら二人に握手する、エリヤンは戸の方に行き、

エリヤン「ポオラさん、私御一緒に散歩に参り度いと思ひますが。」

ポオラ「行きませう。馬車を云ひ付けて下さい。」

エリヤン出で行く、

ドラム「オーブレイ君はお變りもありませんか。」

ポオラ「エエ、エリヤンが來ましてから大御氣嫌ですよ、其の代り私はまるで飼犬見たい

です。』

二人が昔話などして居るところへオーブレイが這入つて来る。

オーブ『おお、カーレイ君、ポオラから僕の願ひを聞いて居るのかね。』

ドラム『否、未だ何も……』

オーブ『それはね、是非君に暫くの間此處に居て貰ひ度いのだ。』

ポオラ『ね。さうして下さいな。それならね、何か御馳走をしますわ、電報で倫敦から魚を取り寄せませう。』

ドラム『それは有難い話ですな。それなら御言葉に甘へませうか。』

ポオラは無邪氣に忙し相に出て行く、

ドラム『仕うだね此の頃は？』

オーブ『仕うにも困つて了ふのさ、ポオラにはエリヤンに對する嫉妬でね、手もつけられん。』

ドラム『其中宜くなるよ。』

オーブ『だがね。僕は到底二人の心が一致する機はないと思ふのだ。エリヤンは全く天女見た様な清い女だらう。それと反對にポオラと來たらお話にならないからね。心無しと云

はうか、修養が無いと云はうか……ああ、愛して居る女……それが今じやあ全く失望されるやうな無人格の女になつて僕を苦しめる、まあそれは兎に角、彼の天女のやうな娘の行末を父として仕う心配してやつていいのさ、ね、君、僕はそれが一番心配なのだ。』

ドラム『そりやあ君の思ひ違ひじやああるまいかね。君。世の中には君の云ふ様な清いと云はれる女は何人もあるだらう。其の女が此の穢れて居る世の中に永久に其の天女の姿を保たれるであらうか？それが一つの疑問だ。其處でだ、僕に二つの策があるのだ。一つは此の世の天國へ云はれる其處へ封じ込めて了ふ、でなきあ、世の中に出して浮世と云ふものは斯うしたものだと思はせて自分で自分の行く道を求めさせる……即ち未來有望だと思ふ良人を見出させる事だね。』

オーブ『然し其れ迄になる道行が險呑だよ、それに世の中に出ると直ぐポオラの身の上も知る。』

ドラム『知つたつていいじゃあないか。却つて世の智識が廣くなるわけだ。人生觀が出来るよ。』

オーブ『それはいい話だが、僕にはそれが出来ないのだ、と云ふのは僕は殆ど世の中から遠去かつて居るんだからね、娘を世の中へ出す道がないのだ。』

ドラム『そりやあ何ほでもあるよ。』

此の時外に馬車の音がして給仕がコーテリオン夫人の來たのを告げる、間もなくエリヤンと連れ立つてコーテリオン夫人は快活に入り来る。而してオーブレイと親し相に握手する。

コーテ『オーブレイさん御變りもありませんか、まあ早いものですね。私が此の子を知つて居た頃は未だ小さかつたんですもの。時に奥さんは如何遊ばして？近くに居てお訪れもしませんで。』

オーブ『二階でせう。』

コーテリオンは心地よげに椅子に腰掛けて、

コーテ『ね、オーブレイさん。お互に昔は遠慮のない御友達でしたね。元の奥さんとは殊に、ですか今は左様も行きますまい、然し私の様な齡になります、と何かと僻見も出て來ますが私には左様した心持は無いつもりです。私は常も貴君の御幸福を陰乍ら祈つて居るので御座います。何卒、普通裡にお親しく』

此の時ポオラ散歩服を着て這入つて來たがコーテリオン夫人を見て驚いたが、一寸握手して、

オーブ『コーテリオンさんだよ。』

ポオラ『ああ、左様ですか。』

コーテ『私遂御近所に居ても御無沙汰しまして』

ポオラ『まあ御掛け遊ばせ』二人をかける。

ポオラ『御近所ですつて？でも私共此處へ參つてから既う二月にもなりますが御見えにならないから御留守かと思つて、旅行でもしていらつしたのですか。』

コーテ『つい御無沙汰致しまして今日は其の御申譯に』

ポオラ『まあ御申譯に？じやあ御病氣でしたんですか。大變御瘦せになつて居る様ですわ御見舞にも上りませんで……』

コーテリオン不快の顔をして、

コーテ『いえ、私は至つて丈夫です。あの一貴女は未だ御存じないかも知りませんが、二十年前先の奥様のいらつしやる頃はそれはくお親しくして居たので御座いますよ。』
ポオラ『おや、二十年前と云へば私が未だお轉婆をして居た頃ですわ。それは結構でしたのね。』

此の間、エリヤンは懐し相にコーテリオン夫人の傍に立つて話を聞き惚れて居る。ポ

オラの顔を見てニヤリと笑つて、
ポオラ「エリヤン、貴女は昔の話が大變嬉し相ね。でも此の奥さんは御近所に居らつたのに今迄御見えにならなかつたのよ。」

エリヤン夫人の手を握る。

コーテ「此の子はほんとに可愛ですわね。直ぐ私になつてしまひました。ついては、如何でせう。私が倫敦に引越す前に巴里へ一二週間行つて来るつもりですから其の間拜借するわけには行きますまいか、歸つて来る頃は丁度倫敦の季節シーズンになりますから、而して又御一緒に居られますもの。」

エリヤン小さい聲で叫ぶ。

ポオラ「あ！一寸待つて下さい、餘りお話が急じゃありませんか、一體其のお話はオーブレイと前もつてなすつてあつたんですか。エリヤンとは、ああ、左様でせう、既うすつかり相談が定つて居たんでせう。エリヤン。お前は如何思つて？」

エリヤン「私、連れてつて戴き度いのですけれど……ね、お父様……」
「訴ふる様に父親を見る。」

ポオラ「私は、私は、エリヤンを失くさなくつちやあならないんですね。又奥さんにはエ

エリンを引取る特權がおありなのですか、ああ」

オーブ「特權なんて……まあいい、エリヤンは何も永久も歸らないと云ふじゃあなし、巴里から歸りさへすれば、又一緒に居られるんだ。」

ポオラ暫く考へて居たが、

ポオラ「それで定りました。それで、奥さん！エリヤンは何日から御入用なのです？」

コーテ「今日の五時から。それ迄には時間もありませんから御仕度は出来ます。」

ポオラ「ああ、判りました。それ迄に準備をさせませう。」と云ひ乍ら窓の方に行つた留守にドラムールに向ひ、

コーテ「彼の女は全く狂人ですれ。」

ドラム「嫉妬やきは皆狂人ですよ。」

ドラムールとオーブレイが出て去るとコーテリオン夫人も暇を告げてエリヤンに送られて出て行く。其れ迄窓につかまつて茫然して居たポオラは急いで外套と帽子を取り而してベルを押す、オーブレイ入り来り、只ならぬポオラの有様を見て居る、給仕入り来る。

ポオラ「彼のね、此の手紙を直ぐ郵便局へ持つて行つて出して下さい。」と先程の手紙を手

渡す。

オーブ「それは、デヨーヂ、オーレイド宛の手紙だらう、出すのはお止し。」

ポオラ「私の手紙を私が出すのは自由じゃありませんか。」

オーブ「否、出させない。私は出させない。」と給仕の後を追つて出て行かうとする。

ポオラ「彼の手紙を出させなきあ、私は出て行きます。あ、私、今日程口惜しい目を見た事はない。」

オーブ「まあ私の云ふ事をお聞き。」

ポオラ「まあ私の云ふ事をお聞きさい。貴郎は一体何と思つてエリヤンを彼んな不親切な女においそれと豫けてやるんです。一生手許に置き度いと云つた其の口も乾かないうちにオーブ「まあ、左様一圖に云はずに……」

ポオラ「貴郎は、私の様な女の傍にエリヤンを置くのは不安心でせう。貴郎は私からエリヤンを奪へば私は其代りに誰か友達を見つければなりません。」

オーブ「お前はあんな社會の女と又交際を始めるのか、又元の世界に立ち戻るのか。」

ポオラ「さうですよ、さうですよ、私の様な者は清い方達とは到底御つき合ひは出来ませんから、何にも云はないで下さい。」

ポオラ激して出て行く。オーブレイ其の後を茫然見送る。

第三節

ハイヤリムなるオーブレイの書齋、窓は總て開け放されて日の射して居る庭園が見通される。例の如く室内の調度は極めて贅澤である。美しい髪を亂して人形の様に着飾つたオーレイド夫人は土耳其格椅子に凭つて居る、ポオラは沈んだ蒼い顔をして卓に向つて居る。

オー夫人「ああ！茫然して了つた。おや皆さんは？」

此の時オーレイドが這入つて来る、ポオラ給仕の持つて来た珈琲を受取つて、

ポオラ「デヨーヂさん、珈琲は如何？」

デヨーヂ「否、有難う。そろ／＼ウイスキーの時刻ですね。ね、奥さん。什うです妻の今夜の美しい事。」

ポオラ「エ？何です。ああ、お美しいわね、」

デヨーヂは長椅子に行くと直ぐ眠つてしまふ。

オー夫人「一寸、一寸、ポオラさん、私来て見て随分驚いちゃつたわ。それはね、オーブ

レイドさんと貴女と思つたより仲がよくないんだもの。何是さ。何故もつと仲よく出来な
 いんだね、久しぶりに會つたんだから面白い話でもして仲の良いところでも見せて呉れた
 らいいのにね。出来る事なら二人の仲をよくしてあげ度いわね。」

ポオラ「有難う。貴女は中々敏いわね。」
 オー夫人「ね。ポオラさん。お前さん、既う少し結婚の幸福と云ふことを考へて見ちやあ
 どう？私等に結婚と云ふ事がなかつたら眞當に詰らないものよ。幸福な家庭をつくと云
 ふ事が女の務めじやあないか知らん。一体お前さん達は何時から其處になつたの。」
 ポオラ「さあ……私よくは覺えて居ないけれど何でも貴女に手紙を出した時から口も碌に
 利がなくなつたんだわ。」

オー夫人「でもまあ、私等が直ぐに來られてよかつたわね。」

ポオラは幾度も夫人の顔をデロリと見る。

ポオラ「フン。御蔭様でね。」と云つて急に氣づいた様に、

ポオラ「此の様な淋しい田舎に切角來て頂いて何にもお構ひもしなくつてデヨーヂさんに
 は眞當に御氣の毒ですわね。私の事よりまあ旦那様を心配しておあげなさいよ。」

オー夫人「其處事はちつともないわ。家に居る様な吞氣をして居るんだもの。でもね私は

幸福よ。と云ふのは夫婦仲がいいからなのぢやあないよ。お前さんも金剛石と寶玉の事で
 今朝も大喧嘩したのを知つて居るだらう。人の家で椅子を二つも碎すなんて、随分癩癩持
 よ。私もね、身分柄として彼の位、品は持つて居なくつちやあならないから借金させても
 買つて貰はなくつちやあならないのよ、それ迄には私の部にはめちやくになつて了ふだ
 らうと覺悟して居るのよ。」

ポオラ「まあ、随分ね。」と云ひ乍らピアノに向ふ、

オー夫人「何か聴かしておくれね。昨夜弾いたのは何？ああシユベルの一節？何でもいい
 わ。」

ポオラピアノを弾く、此の時オープレイとドラムール窓から室内を覗く、

ドラム「オーレイド君は何處へ行つたんだらう。」

オーブ「勝手な處に居るさ、妻は熱心に呼むのだが、此方はいい迷惑さ、で、ね君、尙
 う一度ポオラに話して見て呉れないか。」

ドラム「機會を見てね。」

オーブ「左様頼むよ、おや、デヨーヂ君はお眠みですな。」と二人は室内に入る、ポオラは
 ピアノの手を突然止めて樂譜を見る。

オーブ「嘘、毎日御退屈でせうね。如何です球突でも御相手をしませうか。」
 オー夫人「まあ、嬉しい、私大好きです。」と云ひ乍らヂョーヂの方を指して、
 オー夫人「まあ、彼の風たらないわ、貴郎、貴郎」

ヂョー「ウウ……ムニヤ〜〜」

オー夫人「軒をかいてさ、見ともないわよ。」

オーブ「ヂョーヂ君。球突は如何です。」と云ひ乍らオー夫人の手をとつて、

オーブ「カーレイ君、君はポオラを連れて来て呉れ給へ」とオー夫人と出て行く、ヂョー
 ズは漸く立ち上つて、

ヂョー「何？球突！既うウキスキーの時刻じやあないか。」と二人の後を追つて出て行く。
 ポオラ「カーレイさん、貴君はいらつしやらないの。まあ厭やな人、人の顔ばかり見詰めて。」

突然ポオラはピアノを放れて窓の所に行く。ドラムールは土耳格椅子に身を投げて、
 ドラム「今夜は實に好い夜ですね。如何です、庭でも散歩しちやあ、身体の爲めにいいで
 すよ、貴女見たいに左様沈んで居ちやあ損です。」

ポオラ「でも仕方がありませんわ、浮々出来ない譯があるんですもの、私考へなくちやな

らないですもの。」

ドラム「ああ、オーブレイ君との事ですか。ハハハ、今夜の様な晩にまあ出て御覽な
 さい。思ひあつた男と女がしんみりと語るにいい夜じやありませんか。ね、怒つて居る
 女のと云ふものは大したものですよ、男に對しちやあね。」

ポオラ「静かに振り返つて卓の傍に立ち歸る」

ポオラ「貴君は眞當に口がうまい、まるで芝居好きの御婆さん見たいね。」

ドラム「お婆さん、それは結構です、其のお婆さんになつて、一つ貴女方御夫婦の仲直り
 をさせなくつちやあ、實は私も明日はお別れですからね。」

ポオラ「明日ですつて？まあ。もうお倦きになつたの。」

ドラム「いや、どうしまして、御親切にして戴て仲々、實はオーレイド夫婦が來られたか
 らお淋しい事もなからうと思つて、」

ポオラ「私、大嫌い、彼の夫婦は、既う〜顔見るのも厭です。彼の様な女じやあなかつ
 なんですけれどね。」

ドラム「それならそれとオーブレイ君に云つたらいいじやありませんか、」
 ポオラ「ね、ね、それよりか、私困つた事をしてつたの。」

ドラム『何をしたんです。』

ポオラ『それはね、巴里のコーテリオンとエリヤンから良人のところへ来た手紙を私中途で盗んでしまったの。』とポケットから三通の手紙を出して

ポオラ『これです。私、全く何故、這麼真似をしたのか判らないの。全く悪魔にみいられたつてものですね。斯うしてポケットの中に入れて置くと気が氣じやあないんですよ。』

と再び手紙を納める

ドラム『まあ、とんでもない事をしたものだ。でも後にやあ判る事です。』

ポオラ『御仰しやる通り、』とヒステックな笑ひを洩らす、

ポオラ『ハハ、、、』

ドラム『左様ですともハ、、、』

ポオラ『でもね、全くエリヤンは酷いんですもの、良人に斯うして手紙をよこしても私には唯の一度だつて音信もして呉れない……だけれど私は生れてから這麼事は初めてしました。悪いと知りつゝ。どうしたらいいのでせう。』

ドラム『オーブレイ君に直ぐ渡すがいいです。』

ポオラ『いえ〜今直ぐ其麼事は出来ません、女は弱い者ですもの。ああ、それよりも給

仕に渡したら何處かへ捨て、呉れるでせう。』

ドラム『そりやあ、いかん、直ぐ判る事です、それより、今オーブレイ君を呼びませう、』
ポオラ『そりやあ惨酷ですわ、私は到底オーブレイには敵かなはないんですもの。ああ、此の頃たら私は狂人になる様よ。昨夜雷の音を聽いてからと云ふもの、全く神経が昂ぶつてしまつて……』

ポオラ『此の手紙が皆原因なんです。手紙の始末さへつけたらそれで平和です、さあお休みなさい、ほら其の眠相なお顔を御覧なさい。』と其處にあつた鏡を差し向ける、

ポオラ『惨酷です惨酷です、此の顔に鏡を押しつけるとは』

ドラム『オーブレイ君を呼んで來ますよ。』

ポオラ『貴郎は私を殺すんです。ああ、仕うともなさい！』

ドラムール何か考へ乍ら出で去る。ポオラ再び手紙をポケットから出して調べて居ると其處へオーブレイが這入つて來る、

ポオラ『ああ！はい、手紙！私が盗むだ手紙です。』

オーブ『ああ、此の手紙！何心配しなくつてもいいよ。既う濟むだ事だ。』

ポオラ『でも、這麼悪い事をして貴郎は何とも云はないんですか、ああ！判つた、エリヤ

ンは既う歸つて来たんですか、エ？」

オーブ『左様、人を苛めるものじゃあないよ。』

ポオラ『苛めるのは男の事です。一體エリヤンは何日歸つて来るのです。明日ですか、明後日ですか、それとも來週ですか。』

オーブレイは如何にも答へに疲れた様に、

オーブ『まあさう、エリヤン、エリヤンと騒いで呉れるな。』

ポオラ『私、口惜しい。エリヤンが彼の女と一緒だと思ふと、一體、エリヤンは巴里から倫敦に歸つて季節^{シーズン}さへ過ぎたら私の許へ歸つて来るんでせうね。』

オーブ『まあ其の時が来れば判るさ。』

ポオラ『貴郎は、貴郎は、經驗の爲め巴里へやつたつて仰つしやるけれど、それは口實でせう、實は私の様な者の傍に居ると天女のやうな令嬢が直ぐ穢されて了ふからと思つてでせう。エ？ 貴郎。正直に云つて下さい。』

オーブ『左様！』

ポオラ急に立ち上つてオーブレイを打たうとする。

オーブ『まあお坐り。私の云ふ事をお聞き。お前はよく昔の事を云つては苛々^{いらく}するが、私

がお前のエリヤン時代を考へて御覽、』

ポオラ『ああ、私、私、其の頃の事など聴き度がありません。』

オーブ『まあ静かに坐つて御聴きなさい！お前の若い頃と云つても數年前の事だ。先づ其の頃の御前の無邪氣な清い心持を考へて御覽、而して其の頃の友達を……』

一度坐つたポオラは又立ち上つて、

ポオラ『ああ！何とでも仰しやい。私の様な者はエリヤンの清い友達にはなれないと云ふのですか。私だつて……私だつて……』

オーブ『お前は左様は云ふが、日頃の事を考へて御覽、エリヤンを前にして、お前は辻塵事を常に云つて居るか。常もエリヤンに赤い顔をさせる様な厭な話ばかりするじゃあないか、左様平氣で云ふお前だつて七八年前は矢張エリヤン見た様に卑しい話を耳にして顔を赤らめたものだ、』

ポオラ『ああ！七八年前……ああ、既う澤山です、仰しやつて下さるな。』

オーブ『ああ！』と失望して窓の方に行つて戶外を見る、

ポオラ『私の七八年前』と云ひ乍ら静かに考へ乍ら戸の方へ歩いて行つたが堪えかれて椅子に泣き臥す。而して近づかうとするオーブレイを手で避ける。すると又立ち上つて、

ポオラ「ね、ね、貴郎、あのオーレイド夫婦を直ぐ追ひ出して下さい。而して、早く早〜エリヤンを歸して下さい。」と云ひ乍ら上手の戸を開けて出て去る。オーブレイは洗んだ顔を手で蔽ふて椅子に凭ると、間もなく給仕入り來つてコーテリオン夫人とエリヤンの歸宅を告げる。旅仕度で二人の女入り來る。

コーテ「オーブレイさん。」と握手。

エリヤン「お父様」

オーブ「奥さん。おお、エリヤン。」

オーブレイエリヤンに接吻する、

オーブ「今夜お歸りとは知らなかつた。」

コーテ「お手紙を出しても少しも御返事がないんですもの。仕うなすつたかと随分心配しましたよ。」

オーブ「ああ、左様でしたとせう、實にハヤ、實は茲に御手紙は斯うして其の儘であるんです」

と卓の上の三通の手紙を示す。

コーテ「まあ、其の儘ですれ。」

オーブ「實は或る事情の爲め今晚此のお手紙を受けさつた次第で……」

エリヤン「ね。叔母さん。今夜は彼のお話は止めて下さい。」

コーテ「まあ、お仕度をとつていらつしやい。其の顔色はどうしたの。」

オーブ「大變色が悪いよ。」とエリヤンの手を把る。

エリヤン「ね、お父様、今度は大變叔母様に御世話様になりましたわ、けれど私遂々歸つて來ました。」とエリヤンは出て去る、

オーブ「エリヤンは此の儘家に居るつもりでせうか。」

コーテ「實はそれについて御手紙をさし上げたんですよ。それが貴君から御返事がないんですから心配して歸つて來たんです。」

オーブ「心配と云ふと。」

コーテ「エエ、少し心配な事が出來ましてね。貴君御存じのカロライン、アルデル夫人、可憫相に今度後家さんにおなりになつてね、巴里のフリードランドの下宿に御一緒に居りましたの。其の方の弟さんにヒュー・アルデルと云ふ大尉がありますの。何でも印度の土民が一撥を起した時それを鎮撫したとかで大尉になられたんです、其の方と私等は御一緒したんです……で既うお判りになつたでせう。」

オーブ「ああ、判りました。アルデルとエリヤンと思ひ相つたつて云ふのですか。」
 コーテ「眞に濟みませんでしたけれど、何分エリヤンは世間見すの無邪氣な娘で、又淡泊な子供見た様な若い軍人さんが這麼事にならうとは思ひがけなかつたんです。その譯を書いて送りました手紙を貴君は御覽にならないんですもの。然し此の責任と云ふものは皆私にあるんですから。」

オーブ「それは仕方ありません。成つたことは成つたんですから、それよりも其の大尉の人物は如何なのです。」

コーテ「それは私が申さずとも、大尉の武勇談を書いた新聞や雑誌を御覽になれば判ります、一週間と云ふもの土民に包圍された時大尉一人を力にして居る老若男女の前で生きるか死ぬかと云ふ場合も莞爾として戦つて居たと云ふ話をエリヤンは什麼に感心して聽いて居たでせう。其の時の様子つたら全く天女でしたよ。エリヤンの心に忽ちに勇悍な大尉が懐しく映つたのも無理はないと思ひますわ」

オーブ「でも私の位置になつたら……」

コーテ「私に若し娘があつてアルデル大尉の様な人に結婚を申し込まれたら、私は喜びます。」

オーブ「其處に信用して居るんですか。」

コーテ「兎に角私の家迄いらつしてアルデルさんに會つて下さい。」

オーブ「それぢやあ此方に來て居るんですれ。」

コーテ「エエ。それで明日正式に貴君に御目にかゝる筈になつて居るんです。私は奥さんに今日は失禮して歸りますわ。」

エリヤン入り来る。

エリヤン「あら叔母様、未だ入らつして！私既うお歸りになつたかと思ひましたわ。」

コーテ「それなら左様なら、と二人相ひ抱く。」

コーテリオン出て去る

オーブ「私、一寸コーテリオンさんの處迄行つて來るかられ。」

エリヤン「エ？ああ、御父様、怒つていらつしやりやあしない。でもね、御父様、私家に居た方が宜う御座いますわね。」

オーブ「お前眞當に左様思ふ？それが眞當ならね、ポオラに柔順やさしくしてやつてお呉れ。」

エリヤン「あら、私、不親切でしたのでせうか？」

オーブ「否、左様云ふわけぢやあないがね、只親切にしてやつて呉れさへすれば御父様は

安心するのだ。」

と云つて出て行く後姿を見送つてエリヤンは暫く茫然として居た。其處へ薔薇の花が飛び込むので驚いて取り上げるさ突然ヒューアルデル大尉が這入つて来る、

エリヤン「おや、ヒューさん」

大尉「シ！一寸戯談に来て見たのさ、實はれ彼の家は淋しくつて仕方がないから、貴女に會いに來たんです。御父様らしい方にも其處で會つた。」

エリヤン「いらつしちやあ私困るわよ。れ歸つて頂戴れ。」

大尉「貴女は眞面目に出るからいかん、歸りますよ。さようなら。ですがね、エリヤンさん彼のフリードランド街の事を思ふと、眞當に面白かつたれ。」

エリヤンは握手しやうとすると大尉は抱かうとする

エリヤン「今夜は勸忍して下さいれ、」

大尉「今夜は大變冷淡だれ。僕は是れで別れちやあ今夜眠れない、れ、エリヤンさん。庭に出て下さい。彼の話を定めて了ふかられ、彼の紫杉の木の下へれ、僕一足先に行つて待つて居るから、」と出て行くと直ぐポオラ入り来る、

ポオラ「おや、エリヤン一人！どうしたの！」

エリヤン「私、コーテリオンの奥さんと歸つて参りました、多分既う他へは行かないでせうと思ひます。」

ポオラ「まあ彼の奥さんと喧嘩でもしたの？」

エリヤン「さうじゃあないの。あの、接吻して下さい、」

ポオラ「まあ今日は如何したの。」

エリヤン「私れ、今日から貴女を愛し度いんです。」

ポオラ「お、エリヤン。」と接吻をして泣く、

エリヤン「私れ、少しお話し度い事があるの、」と二人は手を把つて土耳其椅子に凭る、

エリヤン「今度れ、私等の居た宿に母様のお友達であつたプレットンの奥様が弟さんと御一緒に居らしたの、其の弟さんがれ、其の弟さんが……」と云ひかけ坐を立つ。ポオラ其の後を追つて

ポオラ「エリヤン。其の弟さんが、貴女を戀したんでせう、それで判つた、ああ、貴女は私等をよくもお欺したね。心の冷淡な天女の様な顔をして居て……ああ立派な天女だわ。」
エリヤン「貴方は只私を馬鹿になさらうとなさるんですれ、既うお話しは止ませう」と長椅子に座る

ポオラ「私、大變な嫉妬家なんだから、氣に觸つたら御免なさい」とエリヤンの前に跪いて抱くやうにして、

ポオラ「何も今更其廢事で氣を悪くしなくつてもいいわ。私は此の頃狂人のやうになつて居るんだから……兎に角何も皆話して下さいよ。」

エリヤン「實は、今コーテリオンさんのお宅にヒューさんが居るんです、ところが先程急に來まして、今庭に私を待つて居ますの、」

ポオラ「まあ、ああ、それならね、私今直ぐ會ひませう、さあ呼んで來て下さい。おや鏡は？」と云ひ乍らマントルピースの上の鏡に向つて忙しく身繕ひする。エリヤン窓の處へ行き間もなく大尉を連れて入り來る、エリヤンが二人を紹介するとポオラは一度クルリと後向きになつたが今度は向き直つて、

ポオラ「おや、御氣嫌やう、暫く。」

大尉「御氣嫌やう、」

ポオラ「あのね、此の方とは巴里で御目にかゝつた事があるのよ。でね、一寸お話があるからエリヤン、一寸の間彼方へ行つてお出で、」とポオラは自分で戸外に連れ出してから、アルデルと相ひ對して、

ポオラ「とんでもない事になつたのね。」

大尉は殆ど顔色を失ふて、

大尉「あれから、印度へ行つてね。」

ポオラ「其廢事より、二人の事はどうすればいいのさ、」

大尉「タンカレイ君は何も知らないんだらう。吾々が一緒に居た事を、」

ポオラ「他の事は知つて居るけれど、貴君との深い關係は知らないわ、ああ、私、如何しやう、狂人になる様だ、貴君には既に二度と逢ふまいと思つたのに、貴君は私の生命を取りに來たのね」

大尉「僕は貴女に盡せる事だけは盡して置いた筈だ、」

ポオラ少し悄然として、

ポオラ「ああ！私が悪かつたわ、」と云ひ乍ら椅子に身を縮めてヒステリーの如く歎息しつゝ、
ポオラ「私は今夜初めてエリヤンから柔しくされて嬉しいと思つた矢先に又這廢事が起つて仕うしたらいゝんですよ。」

大尉「今更仕方がないさ。然し誰も僕等の事を知らないだらうから秘密にさへして居ればいいじやあないか。」

ポオラ「一つそタンカレイに話してしまひませう。」
 大尉「そりや悪かん、其麼事したら僕は仕うする？ エリヤンを失くしてしまはねばなら
 ないじゃあないか。僕にはそれけ到底出来ない。」

ポオラ「何も屹度話すと云つたんじゃあなし、騒がなくつてもいいことよ、」
 ヒューはポオラを押へる様にして、

大尉「僕は今迄貴女には少しだつて不親切な事をした覚えはない、それだのに何も其麼に
 苛めなくつてもよささうなものだ、エリヤンは實に清い女なんだ、僕はエリヤンの前では
 何もかも打ち開けたんだ、而してエリヤンは印度での僕の功績に對して昔の罪は赦して呉
 れたんだ、今更、今更、彼の天女の様なエリヤンとの仲を裂かなくつとも……」

ポオラ「タンカレイが歸つて来るから既う歸つて下さい。」
 大尉「仕うすればいいのだ。」

ポオラ「仕うすればつて、私は、私の好いた様にしますよ。只タンカレイに話せばいいの
 です、」

大尉「話す？ 愈々、よし！ それなら僕にも覺悟がある！」

ポオラ「覺悟とは？」とヒューの後を追ふ。

大尉「自殺するまでさ！ 左様なら、」

ポオラ「左様なら。」

ヒューは出て去る、後でポオラ元の椅子に歸る途端、鏡が床の上に落ちた、それを取
 り上げてポオラは疑乎と視る。

第四節

前幕と同じ、ポオラは鏡を持つた儘茫然として居る處へ、オーレイド夫人入り来る、
 オー夫人「まあ鏡など見て仕うしたのよ。オーブレイさんは何時の間にか影が見えなくな
 つて了つたわ。」と云ひ乍ら長椅子に凭つて、

オー夫人「彼の話ね、」

ポオラ「既う澤山よ、」

オー夫人「ああ眠くなつちまつた。良人にも困つてしまふわ、何にもせず茫然ばかりし
 て居てさ、あれじゃあ今に伯爵の位も失くなつてしまふ、」

ポオラ「ほら来てよ、」

此の時オーレイドのろくとして蒼い顔をして這入つて来る。

オーレ「今夜はまあ仕うした事が、オーブレイ君は何處へ行きました。實はね、少し家庭の事に就いて御相談して見度いんですが、奥さんまあ聽いて下さい、私には一人の老母があるんです、私は其の老母に對して大變心配をかけて居るんです。』

オー夫人「ああ云ふ勝手の話をし出すんですよ。私の老母には少しも構つて呉れないくせに。』

オーレ「私はね此の女の爲めにすつかり親類中の信用を落してしまつたんです、』

オー夫人立ち上つて、

オー夫人「お止しなさいよ、さあ茲で喋舌らすと直ぐ二階に来て下さい、さあ御出でなさい。』

オーレ「命令がましい事を云ふな」と云ひ乍ら卓の上にあつた飾物に手をかけたがポオラに止められて下に置く、

オーレ「奥さん、お寝みなさい。』

オー夫人「オーブレイさんに宜しく。』

二人出て去ると間もなくドラムールが這入つて来る。

ドラム「オーブレイ君は?」

ポオラ「今ね、コテリオンさんのお家へ行きました。實はエリヤンが、今夜歸りましたの委しいお話はオーブレイから聽いて下さい。』

ドラム「おや、左様ですか、時にオーブレイ君と貴女は仲直りが出来ましたか。』

ポオラ「既う出来ましたよ。悉り。』

ドラム「それは御目出度い。それなら僕も明日は安心してお暇が出来やうと云ふものです。久しい間御厄介になりました改めて御禮を申します、』とポオラと握手して出て去る。オーブレイ忙しげに入り来る、

オーブ「おお、ポオラ! お前エリヤンから聞いたかい。』

ポオラ「聞きましたよ。』

オーブ「實に意外な事が出来たものだ。然しエリヤンも何れは結婚しなければならぬんだから、ああした勇悍な男を良人に持つたら幸福だらう。私の理想にもかかつて居る、お前も彼のアルデル大尉の話は知つて居るだらう。』

ポオラ「知つて居ますよ。私さつきアルデル大尉に會いました。』

オーブ「エ? 彼のアルデル大尉に?」

ポオラ「エリヤンに會ひに来たんです、貴君、そら結婚する前の晩に貴君に渡した手紙が

あるでせう。貴君が焼いてしまつた、彼の手紙の中にアルデールの名があつたんです。實は少しの間一緒に居た事があるんです。』

オーブレイは突立つた儘身動きもしない。

ポオラ「斯う云つたら嘸貴郎は私が憎くいでせう。打つなり、殺すなり仕うともして下さい。』

オーブ「お前等が話をして居る時にエリヤンは何處に居たのだ。』

ポオラ「戸外に居ました、決して二人の話は聴きやあしません。』

オーブ「ああ！』

給仕入り來つてアルデールからの手紙をポオラに渡して去る。

ポオラ「貴郎、讀んで下さい。』

二人は其の手紙を讀む、それには既う此の土地を捨てる事が認めてある。

オーブ「既う是でいい。』と云ひ乍らビリビリに碎いてポケットの中に入れて了ふ。其處へエリヤンが遣入つて來る。ポオラはそつと室内から出て去る。

オーブ「エリヤン、私はね、既うお前を彼の大尉に逢けせる事は出來ない。』

エリヤン「故何でせう。』

オーブ「而して大尉をお前の婿には出來ない。それには種々の事情があるのだ。大尉の行の上に於てお前の良人として不相應な點がのるのだ。』

エリヤン「お父様、それは眞當で御座いますか。でもお父様お會ひ遊ばしたんではないでせう。ですから明日にでも大尉におあひ下すつたら何の様な人物か判ります。』

オーブ「其の大尉は最う此の土地には居ない。』

エリヤン「エ？でも今少し先に茲へ來たんですのに。その中傷は必ずポオラさんがなすつたんでせう。それは判つて居ります。ね。お父様私はヒューさんから若い頃の不品行をすつがり聞きました、而して私は神の御心を以て其の罪を許しましたと云ふは、若い過去に何の様な罪を犯されましたも、あの印度にあつた時の働きは實に神様の御心になつた立派な行なんですから。私はさう思ひましたの。五十年間罪の無い日を送つた人より貴い犠牲の一週間を送る人の方が立派だと思ひました。』

オーブ「今夜は其の話はよしてお呉れ、』と行かうとするのを止めやうとしたがオーブレイは構はず立ち去つた。エリヤン窓を開けて

エリヤン「ポオラさんく、』

ポオラ蒼白めと顔をして入り來る。

エリヤン「貴女でせう。ヒューさんの事を中傷したのは。判つて居ます。ポオラさん、貴女はアルデール大尉を前から御存じでしたのね、あ！判りました。」

ポオラ「それが仕うしたんです。貴女は何故私を始終嫌つてばかり居るんです。さあ其の理由をお云ひなさい。」と戸の處でエリヤンを押へてこづき廻し乍ら。

エリヤン「何、何をなさるんです。私はね、初めて御目にかゝつた時から貴女の素性は判つて居ました。仰しやる事から考へても、決して貞淑な方とは思はれませんでした。實は私は貴女の様の方が私の母親になつたのを悲しみました。」

ポオラ「エリヤン私は、其麼卑しい女じゃあない、悪い事などちつともした覺はない母親に向つて其麼失禮な事をよくも云はれたものだ！」と強く突き飛ばす、途端にオーブレイ入り来る。

オーブ「如何した〜」とエリヤンを起す、

エリヤン「否、どうもしません。」と黙つて出て去る。

ポオラ「あのね、貴女、仕うしませう、エリヤンは私をすっかり嫌つて居るのです。最初から、而してアルデール大尉の事も知つて居ます。既う取り返しがつきません、私は覺悟しなければなりません。」

オーブ「エリヤンが……それは困つた。」

ポオラ「私はエリヤンとは到底折り合はないんですから私出て行きませう。」

オーブ「おお、ポオラ。それには及ばぬ、エリヤンを又可憫相だが尼寺へやるより他ない。而して吾々は旅行でもして新しい生活をするんだ。」

ポオラ「でも、貴郎は何時迄も私の昔の事を想ひ出すんでせうね、ああ！私も既う齡はとるし、昔のやうな美しさは失くなるし、月日が経てば、私は屹度貴君に捨てられて了ふのは判つて居ます。」

オーブ「おお！ポオラ」

ポオラ「あらドラムールさんが来る様です、私は逢ふのは厭ですから行きます。」とポオラ出で去るとドラムール入り来る。

ドラム「おお、オーブレイ君、今君に會おうとコーテリオンさんを訪れて行つたんだ。」

オーブ「左様！、而して？」

ドラム「今度の話聞いたよ、然し不思議な事もあるものだ。彼の大尉と云ふのが散歩に出たつきり歸つて來ないのだ、ところが何處ぞへ行くと云つて手紙が來たのだ。」

オーブ「然し、君はね、エリヤンを世の中へ出す様に忠告して呉れたが、大變な過失だつ

た。」

ドラム『でも、彼の大尉なら立派相じやあないか。』

オーブ『ところが、ところが大變な悪魔だ。ああ！呪つても呪つても倦き足らん、君、アルデールはポオラと……ポオラと……ああ、今夜拘引までして居るんだ、』

ドラム『エ！エ!!』

此の時突然ころぶ様にエリヤンが這入つて来て、

エリヤン『お父様、お父様、大變！大變、あの、ポオラさんが……』

オーブ『何仕うした。どうした。』

エリヤン『ですけれど、行かない方が……』と父が苛立つて出やうとする手を押へると又突き放されてドラムールの前に仆れる、オーブレイは飛び出して行く。

ドラム『ど、仕うしたんです。』

エリヤン『私、今、先程餘り云ひ過ぎたからお詫びをしやうと思つてポオラさんの室へ行くくとドタンと物音がしたものですから扉を開けると……ああ……自殺、自殺、確に私が殺した様なものです。ね、私さへ愛してあげたら……』と土耳其椅子に悄然と腰をかける。

ドラム『エ？自殺!!』と戸の方へ急いで行つて戸を開けて屹と戸外を見る。——(幕)——

シヤントクレール

ロスタン作
加藤朝鳥譯

シヤントクレエル

登場動物

シヤントクレエル(雄鶏)

猫。

パトウ。(番犬)

七面鳥。

鷓鴣鳥。

家鴨。

雄の孔雀。

若いギネア種の雄鶏。

夜鶯。

雌の雉。

大公爵。

悪性の聲を出す梟。

老ひたる雌鶏。

小さな虫けら。

白い雌鶏。

闘鶏。

灰色の雌鶏。

獵犬。

黒い雌鶏。

郵便の役目をする鳩。

斑色の雌鶏。

啄木鳥。

第一幕

雌の雉の夕暮

納屋の前の庭。右手に藤の捲き纏つて居る家、左手には往還に通ずる納屋の門。犬小屋。後には低い壁の垣があつて、それを越して田舎の景色の背景廻に見える納屋の庭には雌鶏。雛鶏。家鴨。七面鳥等數羽。籠の中に一羽の黝鳥。壁垣の上には一疋の猫が居眠をして居る。

白い雌鶏（嘴をコッコツと音させながら）『美味しいわ。』

他の一羽の雌鶏『何を喰べて居るの』

他の總ての雌鶏（其處に急ぎ集りながら）『喰て居るのは何。』

白い雌鶏『小さな青蟲よ。丁度此の蟲が喰べた薔薇の葉の匂がして胸がすつきりする程美味いわ』

黒い雌鳥（黝鳥の這つて居る籠の前に立つて）『眞當に黝鳥さんは御諷が上手ね。妾驚い

まつたのよ。』

白い雌鶏『驚くにはあたらないわ。甥だつてその位は歌へるわ。』

七面鳥（崇嚴に）『甥はシキリ鳥の牧者から傳授されて居るのぢや』

家鴨『でも甥は諷を終まで歌つた事がないぢやないか。』

七面鳥『歌はうと思へば歌へるのぢや。』と云つて黝鳥が歌つて居た諷を口眞似ながら『野邊に逍遙い逍遙ひて、カルカルカル……』ぢやね。カルカルと云つてそれから先を云はない處に藝術の妙があるのぢや。ぢやないか。黝鳥。』

（此の時黝鳥は其籠の前の小さな臺の上に出て来て二三度頭をさげて禮をする）

雛鳥（驚いて）『黝鳥は籠から出ることが能るの』

黝鳥『能るとも。此の乃公の尾の力で。』

七面鳥『黝鳥は出る事も這る事も出来るのぢや。あの籠は弾機の仕掛ぢや。カル、カル、カル、……カルから先は云はないぢや』

黒い雌鶏（後の壁垣の上に咲いた花に蝶が來たのを見附けて）『あれ。何んて美しい蝶々だらう。』

白い雌鶏『何處に。』

黒い雌鶏「忍冬の上に。」

他の一羽の雌鶏（蝶々を凝視しながら）「何んて美味……可愛い蝶々！」

黝鳥「可愛さあまつて、食べて見る……」

一羽の雛鳥（面目さうに）「黝鳥さんの口のいいこと。諧謔ていらつしやるわ。」

七面鳥「諧謔る以上なのぢや。貴女達は能く聴くのぢや。われわれの黝鳥は貴女達を笑はせながらもちやんと考へさせて居る。黝鳥は諧謔の衣を着たる説教者ぢや。」

一羽の雛鳥（一羽の雌鶏に）「お母さん。何故猫と犬とは仲が悪いの。」

黝鳥「それは犬がいつでも劇場で猫の場所を占領するからぢや。」

雛鳥（驚いて）「猫や犬やが芝居に行くの。」

黝鳥「默劇と云ふのを見るのぢや」

雛鳥「エッ！」

黝鳥「薪の樓に炎が舞ふのを見やうと思つて、二人とも爐側の石を争ふのぢや。」

七面鳥（興じた調子で）「眞當だ、誰でも仲が悪くなると云ふのは、其の原因を糺せば領土の争からだ。人間もそれだ。甘いことを云つた。」

斑の雌鶏（嘴でコッコッコやつて居る白い雌鶏に向ひ）「貴女は胡椒をお喰りなの。」

白い雌鶏「いつも喰るわ。胡椒を喰べると羽に薔薇の様な光澤が出ますの」

遠くの方より聲「クックーン」

白い雌鶏「アレー、何でせう」

聲餘程遠方より「クツリーン」

白い雌鶏「ほととぎす？」

灰色の雌鶏（興奮して走り来りながら）「何方の郭公？森に居るの？厨なの？」

聲（尙ほ一層遠方より）「クツクーン」

白い鶏雌「森に居る郭公よ。」

灰色の雌鶏（氣乗のしない嘆呼吸をして）「あの……厨のを……妾見損れたわ。」

白い雌鶏（小さい聲で私語く様に近よつて）「貴女は厨のを愛して……」

灰色の雌鶏（悲しさうに）「まだ一眼も見ないで眞實に妾は……彼の方は厨の壁に懸つて居る箱の中に棲んで居るのよ。丁度あの外套と獵銃の上に當る處だわ。彼の方が歌ひ出すと、妾は即刻に走つて行つてお姿を一眼なりともと思つて思ひつづけて居りますが、いつでも妾が行つた時にはあの箱が閉ぢてしまふのよ。今夜は何事かをして、此處の扉の側に立つて居る覺悟なの。」（と云つて入口の處に位置をとる）

聲『白い雌鶏さん!』

白い雌鶏(頭をしゃくるやうにして周囲を見ながら)『妾を呼ぶは誰方?』

聲『乃公だ。鳩だ。』

白い雌鶏(聲の方向を見ながら)『何處にお在なの』

鳩『屋根だよ。』

白い雌鶏(頭を伸して鳩を見附けて)『オヤ。郵便屋さん。什うしたの。』

鳩『大氣を飛んで廻る乃公の商賣だから仕方がない。今夜は此處に泊めて戴くとせう。で乃公はなあ……』

他の一羽の雌鶏(眞面目な顔をして白い雌鶏の方に走り行き)『何を喰べて居て?』

他の澤山の雌鶏ども(皆走つて集りながら)『何を喰べて居るの。』

白い雌鶏『麥の粒よ。』

灰色の雌鶏(白い雌鶏に私語きながら)『先刻も云つたやうに此處の扉の側を動くまいと思ふの。』(と云つて扉の方を指す。)

白い雌鶏『しかし扉は閉つて居てよ。』

灰色の雌鶏『さう。しかし茲であの歌が聞こえるわ。聞こえると直に頭を伸して妾の郭公

を見るわ。――

鳩(待ちきれないと云ふ調子で)『白い雌鶏さん。』

白い雌鶏『チョイト。ちよつと待つて下さいな。』(と云ひ捨て、灰色の雌鶏の方に向ひて、頭を伸して)『貴女が郭公を御覽なさるつて。何處から見えるの。』

灰色の雌鶏(嘴で扉の下の方にある小さな丸い穴を指しながら)『茲の猫の這る穴からよ。』

鳩(叫ぶほどに大聲をあげて)『よう。こら。乃公や茲で、此の雨樋の上で足が凍るわい。』

こら。雌鶏の一番白いのさん。』

白い雌鶏(鳩の方にホッピングして)『貴方何かお仰つて。』

鳩『いや。あまり執固過ぎてこれは失禮。乃公は先刻からの心願だが、一眼……ほんの一眼で好いから見さへすれば、頼み甲斐があると云ふものだが……』

白い雌鶏『一眼つて何を?』

鳩『ほんの、ほんの一眼。瞬する間でも好いたが。』

白い雌鶏(ヂレッタさうに)『何んですねえそんなに。』

鳩『と……鶏冠を。』

白い雌鶏(他の雌鶏どもを顧みて笑ひながら)『ほほ、ほ、ほ、あの見たいつて……』

鳩（非常に興じた調で）『ほんの。ほんの一眼だけ。』

白い雌鶏『誰も誰も感心して見るあの鶏冠のことですものね。』

鳩『そりや。歸つてから、鳴どもの土産話にするんだから。』

白い雌鶏（悠々と嘴で何かをたきながら）『勿體ないほど。美しいお方ですよ。』

鳩『乃公達も時々鳩巢のなかでお歌を聞いたが、あの歌は此の邊の景色に風致を添へる事あの山の上の白い笹よりは迥に迥に増だ。あの方の雄叫は東雲の空を金の縫箔にして、車の山の峯々に曙の輝を閃かすのだ。雄鶏の君。乃公達はいつでも讚美して雄鶏の君と稱へる。』

黝鳥（籠の中で跳をしながら）『こりや。こりや。こりや。どう云ふ理で皆の胸が斯う騒ぐぢや。』

一羽の雌鶏『妾どもの雄鶏で。』

黝鳥（頭を籠の間からさし出しながら）『乃公の妾の、貴女のわれわれの、みんなの共同持の雄鶏の爲めにか。』

七面鳥（鳩に向つて）『もう少時で御座るのぢや。』

鳩『足下はあの方とお知遇で御座るか。これは羨ましい事ですな。』

七面鳥（嚴然として重々しく）『乃公は彼が極稚い時から知つて居る。あの雛つ子——乃公

の眼には永久彼は雛子に見えるのぢやが——よく乃公の處に喇叭の稽古に來たものぢやで。』

鳩『へい。では足下が御教傳の任にあたらせられて。』

七面鳥『慥に。誰でも喉の音を出すやうな鳥ならば、連れてお出なさい。乃公が教へてやるから。』

鳩『で、あの方は何處で御誕生を。』

七面鳥（古ぼけて破れ傾いて居る、蓋のしてある籠を指しながら）『あの古風な籠で。』

鳩『してあのお方を育てた母御は、まだ健全であらうか。』

七面鳥（再びさきの古籠を指しながら）『あそこに御座る』

鳩『何處に』

七面鳥『あの古籠の中に』

鳩（愈々心を動かされて熱心に）『御血統は……』

七面鳥『母御はまことに古風な雅かなガスコン種で、ポーの近所で御生れになつたのぢや。』

黝鳥（籠の間から頸を差し出しながら）『あの母御こそはヘンリイ四世陛下が、佛蘭西國民

残らずに料理させて見たいと宣はせられたる鶏と同じ類なのぢや」

鳩「あのお方を育てたと思へば、嘸かし母御の肩身は御廣いことで……」

七面鳥「さうぢや。が肩身と云つても謙遜な育ちの親の心であつて、既う可愛がつた雛つ子も立派に成長したからには、其麼自慢なぞ云ふことは忘れても御座らうか。が時折話して見ると、臙臙になつた御心に、さつと愉快な光が閃くこともあるぢや。」(と云つて古籠の方に向いて大な叫び聲をなして)「お婆さん。雄鶏殿がお歌ひ遊ばすぞよ。」

雌鶏一同「おや。雄鶏殿がお歌ひ……」

(此の時古籠の蓋が急に撞がり、羽毛の逆立つて居る老老した雌鶏が一羽現はれる。)

鳩(老雌鶏に向つて穩かに敬して)「御母君殿。さぞかし鶏冠の君が立派に御成長あそばして、御満足の御事と察し上げまする。」

老雌鶏(意味深重に頭をさげて)「誠に満足でな。水曜の收穫は火曜の種蒔とやらでな。」

(と云ふと蓋落ち、老雌鶏の姿かくれる)

七面鳥「母御は時折りあゝして蓋をあけては、一家團欒に意味の深い教へを言はれるのぢや。」

鳩(白い雌鶏に)「シヤントクレルの歌は絶えて啞がれず、絶えて觸れずと云ふことがあ

るが、それは本當かな。」

白い雌鶏(矢つ張りコッコツと嘴をたゞきたがら)「全くさうよ。」

鳩(愈々熱心にして押へきれないほどに)「嗚呼。貴女達は斯う云ふ榆の樹蔭であの様な立派な方と同棲して、嘸かし肩身が廣いだらうな。あの鶏冠の君は名譽の家禽に數へられて五年も十年もいや十五年も許されるのだ。」

七面鳥「肩身が廣い。實に廣いのぢや。」

鳩「して此の貴方がたの……御一同の雄鶏殿の歌を聴けば皆の心が急に浮きたつて来て仕事の手軽くなり酷く物に勵まされ、其の上あの歌一聲で肉食鳥も恐れて逃げてしまふとの事だが、それは眞實かな。」

白い雌鶏(嘴をコッコツうせながら)「全く眞實よ。」

鳩「白い雌鶏さん。あのお歌で温い崇高い鶏卵が保護されて、時には速い馳さへ懼れて逃げてしまつたとか。それも眞實かな。」

鷓鴣(籠の間から外を見ながら)「馳の奴、オムレツの味を占めやうと思つて來たのだつたが、御歌の威光には敵はないで」

白い雌鶏「全く眞實よ。」

鳩「風評に聞けば、あの不思議な御歌には神秘が籠つて居つて、歌へば忽ち鶏冠に麗しい血潮が漲つて、園の罌粟の葩が羞ぢいるとか。それも眞實かな。」

白い雌鶏（餘り問はれるので五月蠅さうに）「さうよ。全く。」

鳩「その様は不思議な秘傳を、鶏冠の君は誰にも教へないのか。」

白い雌鶏「誰も教へられないの。」

鳩「奥様の雌鶏にも教へないのか。」

白い雌鶏（鳩の言葉を訂正するやうに）「奥様ぢやなくつて、奥様達よ。」

鳩（稍驚いて）「え。奥様が幾人もあるのか？」

黝鳥「馬鹿野郎。身分が違うぞ。手前のやうにクツクツと泣くんぢやなくつて、雄鶏殿は

歌うのだぞ。奥様は幾人もあらあ。」

鳩「ぢや。一番の御寵愛なものにも教へないのか。」

頭が總になつて居る雌鶏（云ふ口のもとに）「教へないのよ。」

白い雌鶏（云ふ口のもとに）「教へないのよ。」

黒い雌鶏（云ふ口のもとに）「教へないのよ。」

黝鳥（頸を籠の間から差し出しながら）「シッ。靜に。見い窓で芝居をやつてる。蝶が知ら

ずに頭を花の中に突つ込むで居る……」（大きな緑色の華な紗の昆蟲採集網がそつと壁の上
に現れて、花の間に戯れて居る蝶々の上に行く）

一羽の雌鶏「あれ。何でせう。」

七面鳥（崇巖に）「運命ぢや。」

黝鳥「や。運命が薄い紗の着物着てゐる」

白い雌鶏「網だわ。竿の先にある。」

黝鳥「竿にや罪みや無いが、竿の根の小僧が腕白だ。」（と云つてやゝ大きな聲を出して蝶々を警戒する）「薔薇から薔薇に狂ひまはる可愛い、豪華子も、今夜は留針で飾られる。」

一同（壁の向で注意して近づいて来る網を凝視めながら）「シッ。近づいたぞ。やられたな。

大丈夫よ。否へ。」

突然外の方より「コツケコウコウ——」

（此聲で蝶々逃げる。昆蟲採集網失望らしく暫時揺らいで居たが頓て見えなくなる。）
數羽の雌鶏「おや。あの聲は。」

一羽の雌鶏（此の雌鶏は蝶々の行衛を見やうと荷車の上に飛びあかつて居て）「牧場の向う
に見えるのよ。」

勳鳥（アイロニカルに）『シャントクレエルだ。武士魂が溢れて居る。』

鳩（調子づいて）『え。シャントクレエル。』

一羽の雌鶏『今にいらつしやつてよ。』

他の一羽の雌鶏『丁度今門のところよ。』

白い雌鶏（鳩に）『さあ。よく御覧なさいよ。それは立派な鳥ですから。』

勳鳥（籠の間から頭を差し出しながら）『雄鶏殿の姿を一口に形容して見やうか。』

七面鳥（嘆息した調子で）『それは面白い。』

勳鳥『恬瓜。それも極々上等なのに限るとして、胴に比較をされやうか。足は例へば一等褒賞を受けた松葉五加の莖、頭は一番美麗な胡椒眼は殊の外輝き透き徹つた乾葡萄、尾は贅澤な濃翠の韭の穂そのまゝ。耳は極上々出来のいんげん豆に似たとおもへば、ざつと雄鶏殿の立派な姿の想像もつかうかな。』

鳩（穩かに）『足下は今一つ省いたものがある。あの靈妙なクラリネットの様な聲は何と御形容。』

勳鳥（其の時壁垣の上に現はれたシャントクレエルを指しながら）『さやう。それは省いたが餘の點は全く乃公が形容その儘ぢやらう。』

鳩『否。寸毫も。……全く違ふ』と云つて勳鳥とは全く異つたる眼つきでシャントクレエルの姿をつくづく眺めながら『ある震へる胃のもとには、眞夏の榮光ある戀愛の武士が夕星に黄金の收穫の着物を籍りて装ひ、眩く輝く利鎌を今地から振りあげたと云ふ勇ましい姿がある。』

シャントクレ（壁の上にて長い喉の音をさせて）『コッコオ……ッ』

勳鳥『雄鶏殿はあゝした音をさせるときは、戀して御座るかそれとも何か詩的に巫山戯て見たいと思はれる時だよ。』

シャントクレ（壁石垣の上で不動の姿、頭を高くのべて）『華やかに輝け。眩きばかりに。』

勳鳥『雄鶏殿は今温い大氣を呼ばるゝ。』

シャントクレ『世界を輝かせ。』

一羽の雌鶏『アレ、一つの爪をあげていらつしやるわ』

シャントクレ（優しさあまつて聲が出たと云ふ風で）『コーッ』

勳鳥『あれか恍惚の證據だ。』

シャントクレ『黄金のうちの有り難き黄金よ。我卿を崇拜す。』

鳩（呼吸をこらして）『あれは誰に向つての話か。』

黝鳥（冷笑しながら）『太陽。お太陽様によ。』
シヤントクレ

『羨の露の涙さへ。かはかす君よ。』

なきがらに似たるしほれし葩に

蝶の命を吹きいろゝおほいなる君。

匂ひある桃のさ枝に風ふきて

追ひつ追はれつ散る花見れば

舞ふ蝶に似る。嗚呼靈ある力。

嗚呼、太陽よ君を讃す。充ち満つる君が光り

なべての額に照りなべての果實に匂ふ

なべての花に浸みなべての牧場に漂ふ。

されどたへてつくるなき君が慈光よ。

あたたかき母にも似たる君が慈光よ。

君に讚美の歌となへ、君が行者とならむ哉。

輝き出づる朝には、緑泡立つ盃に

西に別るゝ夕暮は家畜の小屋の窓の邊に

うつりて榮ゆる黄金の光線をたたへたへつゝ。

黝鳥（籠の間から頸を突き出して）『やあ。あれが讚美歌だ。』

七面鳥（積んである乾草の上に悠然としてホツプしておりて来るシヤントクレを眺めながら）『やあ。降りて御座る。鷹揚なものぢや』

一羽の雌鶏（小まい薄葉鐵の四錐形の水いれの前に立つて）

『この新形の水器から……美味いわ』（と云つて水をのむ）

シヤントクレ（納屋の前まで歩いて來ながら）『君はほゝえむ……』

多くの雌鶏（何か喰べて居る白い雌鶏のところを集りて）『何を喰べて居て？』
シヤントクレ

『君は微笑む。向日葵の花の上、君を慕へる花の上。』

君輝けばひらひらと風信旗あり。燃ゆる心。

菩提樹の葉漏りてふるふ君が瞬。紋の影
 幻影の黄金の夢を誰か踏み得む。誰か踏み得む。
 あゝ彩の紋うつくしき菩提樹葉漏る君が夢。

君あればこそ土くれも白瑛瑯の磁器となり
 軒に干したる百結衣も錦の旗とひるがへる。
 乾草塚も君がため、黄金の峯の姿かな
 その塚の右、素朴なるずがるの歌ふ蜜小屋も
 君が光線を浴びる時寶冠を着る燦爛の夢。

葡萄の山に榮ゆる君。豊熟の野に榮ゆる君
 草に照る君。隈もなく照りに照る君
 いとちさき蜥蜴の眼にも白鳥の羽根の上にも
 ひとしく照らす君が幸。偉いなるものに閃き
 しかも尙ほ些事を漏らさぬ。吁。工人の心哉。

物に沿ひ。物に離ざる不思議なる。物も君が影てふ技工が
 君が照る、森羅萬象『影』と云ふ妻の手を曳き
 曳きうつりうつり變れどうつくしき姿二重に生れ輝き
 『影』と『形』と呼び應へ。影に神秘のチャーム宿れり。

われ君を讃す。吁。太陽。薔薇の花の蕊に座し
 河に望めば水の穂に、金剛石の照るすがた
 あはれ枯れんとする樹々に君が慈光を呼びあへば
 忽ちにして若芽萌え。瑞の緑葉茂りしたる。
 吁、太陽よ。君が靈ある力なくんば
 森羅萬象はたち所に存在を失す。

鳩『やゝ。大ぶ土産嘶が出来たぞ。お噂いたしませう。之れで歸つてから長い間友達に自
 慢が出来る。』

シヤントクレ（氣品のある態度で鳩を見ながら）『若い青い翼の旅人や。卿が家族へよろし
 う。卿が妻の珊瑚の様な足もとで、ゆつくりと拙者の噂でもして呉れ。』（鳩は驚んで逃げ

が無茶に葉を食うのだ。急げ急げ。(残つた多くの雌鶏に向ひ)お前達け——(と云ひかけて不圖古い籠の蓋があがつて老耄した母の鶏を見)おやおつ母様。そこに。お早う。(母鶏はしげしげとシャントクレを見る)僕大きくなつたでせう。」

母鶏「お玉杓子も臆ては蛙になるでう。」

シャントクレ「全く。」(と云つて再び雌鶏達の方にむき、命令をする態度をとりて)「淑女等。一列に並べ。役目は畑に蟲を拾うこと。進め！」

白い雌鶏(灰色の雌鶏に)「貴女も行くの。」

灰色の雌鶏「否。妾は茲に残つて、妾の郭公が見たいわ。」(と云つて石油箱の後ろにかくれる)

シャントクレ「よ。總のあるの。(頭に總のある雌鶏に向き)お前は列に這つて居て僻いで居るではないか。」

總のある雌鶏(シャントクレの右に近くよりそつて)「貴方！」

シャントクレ「何だ。」

總のついた雌鶏「貴方は妾を一番愛していらつしやる……」

シャントクレ「シッ」

總のついた雌鶏「それを聴かないと妾は——」

白い雌鶏「シャントクレの左に近くよりそつと)「貴方——」

シャントクレ「何うした。」

白い雌鶏(媚びたる態に)「あの。貴方の一番愛して居らつしやるは妾で……」

シャントクレ「シッ」

白い雌鶏「妾什麼事があつても……」

黒い雌鶏(いつのまにやらシャントクレに近づいて)「貴方……」

シャントクレ「何だ」

黒い雌鶏「妾は貴方の御寵愛の……」

シャントクレ(聞くや聞かずや早口にて)「シッ。」

黒い雌鶏「云つて聴かして下さいな……」

白い雌鶏「御歌の……」

總のついた雌鶏「秘訣を……(と云ひながらピツタリとシャントクレにより添つて来て、軌るやうな聲を出して)「貴方のお咽喉に眞鍮の器械があるからなのれ。」

シャントクレ「さうさう。それが極々秘密に隠してあるんだ。」

白い雌鶏（同じやうに口速やに）「あの貴方は大音楽家のするやうに卵をお飲みになるからでせうね。」

シヤントクレ「さうさう。その通り。お前は偉い。千里眼ぢや」

黒い雌鶏（同じやうに口早に）「あなたは、あの蝸を殻から貫きだしてそれを練つて……」
シヤントクレ「丸薬にして飲むんだ。全くだよ。」

以上三羽の雌鶏一所に「貴方」

シヤントクレ「早く行け。お行きなさい。」（三羽の雌鶏急いで行く。シヤントクレ呼びとめて）「一寸一言。お前達の血潮のやうな髪飾りが見えかくれして、紫蘇や薬草やの間を通り、あの罌粟の花園に行つて、罌粟の葩と、髪飾とが見わけ難いやうになつてから、乃公もお前達のところに行かう。それから葩などは決して壊すのではないよ。花のある圃は地もなる丈け柔く踏み、花に平常も同情を以つてやられねばならぬ。胡羅の花も出る丈け咲かしてやりたい。それから脊に小さな赤い點々のある虫がよく撒形花に居るものだが、お前達はそれが能く見判けられるか。此の圃の花達は皆な同胞で同じ利録のもとに刈られるのだから、大切にしてやれ。さあ速く行け。」（三羽の雌鶏行く。シヤントクレ再び呼びとめて）「それから氣を附けなさい。雛鶏等を一番最先にして……」

一羽の雌鶏「野に連れて行く……」

シヤントクレ「さう。雌鶏等を先頭にして」

皆の雌鶏「さう。行くわ。」

シヤントクレ「最う用はなし。さあ行け」(三羽行く。シヤントクレエル又得手勝手に呼びとめて)「もう一言」(と厳格な聲で)「往還を行く時は決して物を喰べるでない。」(雌鶏達一同頭をかゝめて命令をかしこむ)「さあ。往還を通つて行きなさい。」
角笛(遠くより)「ポッポッポッ。」

シヤントクレ(今行つた雌鶏達の前に走つて行つて羽を擴げて遮り)「一寸待て」

角笛(近くで恐ろしい鼻息と一所に)「ポッ。ポッ。ポッ」

シヤントクレ(震へて居る雌鶏達の前を遮りながら)「待て」

角笛(遠方に消える様に)「ポッ。ポッ。ポッ」

シヤントクレ(雌鶏達の側より)「さあ最うよし。心配するな行け。」

灰色の雌鶏(石油箱の蔭の隠れ場所より出て来て)「妾が茲に居るのは雄鶏殿に判らなかつたでせう。」

總のある雌鶏「戯談ぢやなくつてよ。お蔭で喰べるものが皆石油臭くつてよ。」(一同行く)

シヤントクレ（暫時の後獨りごと）『吁。這麼重たい秘密を脊負つて瘦我慢をして居るのも辛くなつて来た。いっそ這麼重荷を一擲してしまつて、（と言つて兩方の羽交をばたばたと羽ばたきながら）何も忘れて只の家禽になり濟まさうかな。（と云つて鷹場に足をかへながら）しかし乃公は美しい。歩く姿停む姿、鷹揚だ。蹴ることも巧であれば又川など飛び越すことも出来る。乃公の武者振はいつでも衆目環視の中で賞讃を博し卑怯な鳥共をアツと思はせて居る。其の上茲の園は糧食も澤山。衣食足つて歡樂溢れて居る。乃公の鶏冠と眼とは華やかな紅みの色彩。這うして胸を張つて足を鷹揚にかはす時は駄鳥の胴衣も獺の襟巻も仕うして及ばう。其の上乃公は歌の天才である。即ち乃公は獵銃を持ち給ふ主人殿の沈着な威風を眞似て、あらゆる禽屬を統御する資格がある。』

聲（太く野鄙な調子で）『シヤントクレエル。御用心あれ。』

シヤントクレ『乃公に御用心あれと云ふ馬鹿げた獸は、何ものだ。』

バトウ（犬の名）（犬小屋の中にて吠えながら）『乃公だ。乃公だ。』

シヤントクレ（後にのいて）『やあ。バトウか。臉上藁などひつかけて暗處からよう毛むちやらの頭を出しやばらしたな。』

バトウ『臉上藁がひつか、らうが、此の乃公の眼は君が屋根の上から見るとよりもよつく判

る。』

シヤントクレ『何だ。雑種が。』

バトウ『ウ……………』

シヤントクレ『その唸る顔付が全く雑種だ。』

バトウ『否。雄鶏殿。乃公の唸るのも何の爲め。乃公は此の家、此の園、此の庭の守護役だ。とりわけて君が立派な歌の守護神だ。今君が身邊に襲ひか、らうとして居る災害を拂ひのけやうとする眞心がお判りか。』

シヤントクレ『その様なことが當にならうか。卿は犬だからドグマと言ふのだ。』

バトウ『戯談を云はつしやるな。事は愈々非になる。乃公には迫つてくる災難を見ぬく偉い眼がある。乃公の鼻にはテリアー種の犬のやうな鋭敏な嗅觸がある。』

シヤントクレ『しかし卿はテリアー種ではない。』

バトウ『でないとは、シヤントクレエル殿。何うして判るか。』

シヤントクレ『一體に卿の姿は變なものだが、何種の犬か物語つては何うか。』

バトウ『乃公は恐しい程複雑な混血兒だ。漂浪者の血が皆混じて居る。乃公の咽喉の中で、獵犬、鬮犬、ムク犬、チビ犬、あらゆる犬の種類が吠えあつて居るやうな氣がする。』

想像しても見られえ。雄鶏殿。乃公は什麼な犬をも兼ね備へてゐる譯だ。』
 シヤントクレ『成る程。百疋の犬の長所が卿の身體に宿つて居る譯だ。』
 パトウ『時に乃公が兄貴と思ふ雄鶏殿。乃公等二人はお互に知己たるべく生れついたので
 は無いか。君が太陽を歌ひ大地を足搔く時には、乃公も愉快のことがして見たくなる。』
 シヤントクレ『卿はその折、大地の上に横つて太陽の光線を浴びながら眠るではないか。』
 パトウ(悦び啼きをして)『全く。』
 シヤントクレ『太陽と大地と、乃公達二人が共に愛して居るものだな。』
 パトウ『好きだとも、愛して居るとも。乃公は月に向つては吠えるが、太陽に向つて吠え
 た事は一度も無い。大地は乃公はいつでも前足で穴を穿つて、それに鼻を押し込む程に惚
 れぬいて居るのだ。』

シヤントクレ『乃公も熱く卿がさうするのを見うける。だが庭師の妻君は卿が掘る穴につ
 いては別に何等かの解釋をして居ることであらう。それはそうとして、卿が先刻から御用
 と云はるゝは何事であるか。森羅萬象みな静な空のもとに、安穩に眠つて居るのではない
 か。此の謙遜なる乃公の領地には、日こそ照り輝け、何事も危険とは思はれぬ。』
 老ひたる母鶏(その頭で籠の蓋を擡げながら)『卵も壊れるまでは大理石の玉(蓋落ちる)』

シヤントクレ(パトウに)『御用心とは何?』

パトウ『危険なものが二つある。その一つはあの籠……』(と鷄鳥の籠を指す)

シヤンマクレ『エ、』

パトウ『あの諷刺のやうな歌ひかたが……』

シヤントクレ『それが仕うした。』

パトウ『まことに危ない。』

シヤントクレ『何に危ない?』

パトウ『萬事に危ない。』

シヤントクレ(揶揄した調で)『そりやあの歌は變な聲は聲だが……』

此の時孔雀の高い聲が遠くの方からヒヨロ、ーンヒヨロ、ーンと聞こえて来る。

パトウ『それからあの啼聲だ。孔雀だ。』

孔雀(遠方の方から)『ヒヨロ、ーン』

パトウ『あの歌は、此處の部落の歌上手が皆な集つても叶はぬ。眞に巧妙な歌だ。』

シヤントクレ『何。あの歌藝者の歌が。何。あの美容術とやらの痴者の歌が……来るなら
 来れ。』

パトウ（不平不満の聲を唸らせながら）『あの奴は乃公を酷い目にあはせた。君にどのやうな迫害を加へるかも知れぬ。あの二つの危険物は、素朴な温順な乃公等の社會に孔雀は華美の流行と云ふものを黝鳥は不眞面目と云ふ奴を持つて来る。吁。あのあくどい華麗な趣味は、此の唸公が大理のやうな清い領地に富を憧憬れる下司者を生み、あの皮肉な諷刺は輕薄ものを無限につくる。一つは雜言のうちに腐敗を來たす旅役者おどけもの、やうな奴。一つは脂粉の夢のむすぼれて醒めない流行の流行の權化、此の二賊は乃公等の社會から愛と勞働とを奪ひさるもの。一つは贅澤一つは懶惰だ。此温い照り輝く乃公等の領分に世界に恐ろしいこの二つの黒死病が這つて來た。滑稽惡諷の病は知らず知らずの間に聽く者の心を開いて深く深く喰ひ込むで來る華美の歌は、徒らに新奇を衒ひて基礎を忘れさせる』（此の時黝鳥は「野邊にさ迷ひさ迷へば……」と一寸歌つて見る）これ雄鷄殿。寶石よりも眞の麥を尊しとする雄鷄殿。何故黙つて黝鳥にあのやうな歌を歌はして居るか。雄鷄殿。歌の武士の雄鷄殿。』

シャントクレ（鷹揚に）『いやいや。あいつ黝鳥の奴、歌も上手でどの鳥の眞似でもするやうではないか。』

パトウ（不同意にうなりながら）『ウ……ウ……それ。歌は歌つても不眞面目だからいつて

も途中やめにする……』

シャントクレ（籠の中のとびまはる黝鳥を見ながら）『あれは只氣輕な奴さ。』

パトウ（同じ態度で）『彼の氣は輕いかも知れぬが、乃公の心には重く懸つて居る。籠の中に棲む鳥ながら、心配でならぬ。』

シャントクレ『兎に角あれも利巧な鳥は鳥だ。』

パトウ（長い一層ためらつた様な唸り聲を出して）『それはさうだが彼の眼は一度だつて感嘆驚愕の色に輝いた事が無い美しい花の前に出ても杯がある位に思ひ、物を輕蔑卑下して居る顔附語調……』

シャントクレ『しかし。パトウ殿。彼には趣味が無いでもない。』

パトウ『あつても卑怯だ。平生黝い着物を纏つて居るなどとは趣味にしても甚だ怪しからぬ。翅に色を飾る程の勇なくて何うして趣味ありと云へやうぞ。』

シャントクレ『まあそれ程に嚴重に云はずとも、彼の諧謔は通りのものとして、其の想像には案外の創始があるではないか。』

パトウ『何で諧謔だらう。一つ二つのもぢり文句を覺えては聽くものの心を刺すやうな捨科白を云つたり、針小棒大に誇張したり、或は野卑陋劣な言葉を弄ぶ事が、何んで諧謔と

云つて濟して置けやうぞ。」

シヤントクレ「そりや彼の心が實に機轉が速くて、掌をかへすやうなからだらう。」

パトウ「氣轉は速いが、價値は無い。牧場に居る無邪氣な牝牛を、變挺な眼付でバチクリ見ては「牛でも草食ふこと心得とる」などと云ふ面悪さ。又何の罪も無い家鴨が丁寧に御辭儀をしたに對して、「閣々鳴くから其處に嘴が出しやばる」などは言語道斷。癩に觸る奴の惡口雜言が什うして氣轉だらう。奴の言ふことが何のスタイルもなさぬと同様、奴の何處を叩いても頓智や氣轉の出る道理が無い。」

シヤントクレ「しかしさう頭から罵倒したもので無い。彼の服装は近代的で、夜會服などで氣取つて居るところは……」

パトウ「えい。丁度眞の信仰を地に埋めて、其の上を悦び舞つて居る冤僧の様だ。」

シヤントクレ「そこだ。卿はあの鷓鴣を腹まで黒い鳥にしやうとするのかれ。」

パトウ「あの鷓鴣は慥に鳥の變化つたものか。」

シヤントクレ「それにしては體が小さい。」

パトウ（力を罩めて其の兩耳を振りながら）「いや。體に欺され給ふな。惡冤はいつでも小さい姿で現れる。懐中の小刀にも青龍刀の性がある。鷓鴣と鳥と同じことは、丁度縞のあ

る黄蜂に虎の魂があると一つ道理だ。」

シヤントクレ（パトウの鋭い論鋒を面白く思つて）「實際鷓鴣は一言に云へば性質が慘酷で姿が醜く心が白痴だ。」

パトウ「第一あの鷓鴣と云ふ奴は素性が曖昧だ。奴の頭に思想があるかい。奴の胸に情緒があるかい。いつでもカルカル言ふばかりだ。」

シヤントクレ「しかし彼は別に害はすまい。」

パトウ「いや。あの没主義な理由の判らぬカルカルの嘲弄は、暖い情と智慮とを根拔にしてしまふ恐ろしいものだ。毎日毎日乃公が唸り續けて居るのも、この災害が判つたからで乃公は今狂犬にでもなればよいがと思ふほど苛立つて居る。」

シヤントクレ「まあ。靜に。パトウ殿」

パトウ「あ。癩に障る奴の惡諺。此の神聖な領土に滑稽の聲を漲すとは……残念だ。残念だ。行きたい。何處かに遁れて行きたい。乞食の踵でも追つかけて、麴麴の斷片を貰つても漂浪しやうか。茲で骨や筋やを噛むよりは、夕暮の湖の草の茂つた岸で、星を見あげて清らかな水を飲む乃公の幻影……生きた幻影……」

シヤントクレ（パトウが終りの言葉の聲をひくめたのに驚き）「パトウ殿。何故聲をさう低

めて……」

パトウ『いや。星と云ふ言葉。今では其の言葉を大聲では云はれぬ。』(と云つて、深い憂鬱に頭を前足の間に埋める。)

シヤントクレ(慰めながら)『さう情氣るな』

パトウ(再び頭を擡げながら)『いや。情氣るのは馬鹿らしい。大きな聲で吠えさせて呉れ』(と云つて其の肺臓のゆるす限の大聲をはりあげて)『星!』(と云つて満足した調子で)『これで落ちついた。』

多くの雛鳥(丁度後の方を通りかかつて居る處で、笑ひのゝしりながら)アレ星ハ憧憬るんだつて!可笑いことよ。星!だつて』(と云つてワヤワヤと騒ぎながら行く)

パトウ『シヤントクレ殿。聴きたまへ。乃公等の可愛い雛鳥等さへ既うあの口悪。今に黝鳥の眞似をしだす。』

シヤントクレ(鷹揚に歩きながら)『まあいゝさ。乃公には歌もあるし。味方に雌鷄も澤山居る。』

パトウ『その女共……群集と云ふものを信頼し給ふな。且又。君はあまりに歌を高く見積り過ぎまいか。』

シヤントクレ『いやまだ愛もある。愛は麗しく接吻を持つて酬られる。』

パトウ『そこだ。雄鷄殿。乃公も一度は若い寛の花が咲いた事もある。燃える眸と燃える心……夢のうちには乃公も騙された。乃公よりも美しい犬。否悲惨などら犬の代りに乃公の愛は賣られた。』(と云つて咄嗟の怒りに一聲吠えて)『賣られたとは誰の爲め?誰の爲めか君思ひたまへ。』

シヤントクレ(少しく後にひきながら)『乃公を戒めるのか。』

パトウ『あの脛の長い、脚の捻れた、耳の垂た耳朶をいつも踏みさうにして歩くチビ犬の爲めに乃公は賣られた。』

黝鳥(パトウの話すを聴いて居たが籠の間から頭をつき出して)『まだチビのことを愚圖々々云ふのか。老耄れて憎さますます戀敵、淫亂親父仕うしたと云ふんだい。』

パトウ『何んだ。又おどけやがる。一體貴様は何者だ。』

黝鳥『拙者か。拙者は御庭の寵愛もの。』

パトウ『貴様は御庭に居て何か功德があるのか。』

黝鳥『鋭い豫言を告げる。例へば美しい藤の花の様に、拙者は笑と悦びでとりまかれるが功德』(と云つて籠から出て来て地上を飛びまはる)

バトウ（近づいて来る黠鳥に向つて）『ウ……ウ……』

シヤントクレ『まあ。靜に。』

バトウ『何。この偽者奴を……』

シヤントクレ（黠鳥に）『君と話すと、いつでも面白いことを澤山覚えるよ。』

老母鶏（古籠から頭が現はして）『朽ちた材木を叩けば木の粒が出る』と云つてかくれる。

バトウ（シヤントクレに）『奴は君の後では笑つて居る。』

黠鳥（バトウに）『足下は嗅犬だから能く嗅ぎ出す。』

バトウ『雄鶏殿。君が何時も眞心罩めて歌を唱へる度に、此の黠鳥の奴の云ふことに。古い、千篇一律だと。あゝ君が鋸形の紅の鶏冠と同じく古臭いとは何事だ。』

シヤントクレ（黠鳥に）『お前はいつも其慶事を云つて居るのか。』

黠鳥（媚びた素直な調子で）『あの……慥つてはいけないよ。慥りつこなしだ。此の乃公が戲談がかつて一度も雄鶏殿の御氣に觸れたことがないのだから……』

バトウ（黠鳥に）『一體貴様は雄鶏殿を賞めるのか諷るのか。』

黠鳥『部分々々は氣に食はぬが、大體上褒める。』

バトウ『乃公は生一本な心だが、徹頭徹尾褒める。』

黠鳥（シヤントクレに）『閣下は古い。十六世紀だ。乃公は最新流行の最新式な鳥だ。』

バトウ（慥つて荒く）『逃げる。逃げないとその黒い尻尾が血みどりになるぞ。』（が黠鳥おかしな足つきをして近づく。バトウ犬小屋に退却し）最新流行の最新式の牙を出すぞ、ウ……』

シヤントクレ『まあ靜に。これが黠鳥の通り癖だよ。奴だつて眞の美の前に出る時は矢張り美を味うやうになるのだ。』

バトウ『元來イケスカない鳥だ。杜松や忍冬の茂つて居る自由の野をすて、這麼籠に遣つて、腐つたビスケットを咬るなんて卑劣きはまる鳥だ。』

黠鳥『バトウ、君平氣だ。山には時々獵師と云ふ野蠻な獸が來ることを御察しない。御氣の毒や。』

バトウ『乃公の知るは只樹蔭に葉漏る光線の黄金をちりばめた様な美しさだ。』

黠鳥『何んぼ黄金の樹蔭でも、鐵砲玉は通う。鶉なんかは糞用心に樹の葉の蔭にばかり隠れてるが、それでも最後は焼肉にされる。處で拙者は獵師の手にうつ、ても……』

バトウ『しかしあの壯麗な牡鹿など、緑の森を自由に驅りまはつて、夕暮の散歩になど草の間から獵師がうちそこねた錆びた彈丸など拾つて見てはさぞ雄大に微笑むのだらう。』

勳鳥「仕うして、牡鹿とやらも窮迫者。」

バトウ「しかし自由だ。自由だ。足もとはは葦の花が爛漫と咲きみだれ、戀……」

勳鳥「古い。古い。紀元節の思想だ。世の中に拙者の籠の止木ほどな樂園があるものか。嗚呼幸福なる此の籠よ。わが九十九箇年の租借領の此の籠よ。(バトウがおそろしく睨むで唸るので側によりて)バトウさん氣が狂つて飛びかゝること丈けは御免だ。して此の籠には立派な磁製の水呑もある。」

シヤントクレ「稍くどいのをきらつて」『オイ。もつと簡単に話せ。簡潔が君の得意ぢやないか。』

勳鳥「閣下を其處えすはらせて、細目に姿を見る心算。」

バトウ「ウ—— 簡潔に出来るならば、しからば」

勳鳥「しからばとは立派な喧嘩腰……」

シヤントクレ「これこれ。何と云ふゴツゴツした話し振りだ。」

勳鳥「いや。是れが最新式の話し振へい。拙者は都の燕と友人だが、燕君も矢つ張りこの新流行の座談振り。」

シヤントクレ「いや、乃公も都の詩人の庵に居る駒鳥と知己だが、駒鳥君の話し方は君の

とは反對だ。」

勳鳥「いや拙者は拙者の流義でやる。凡そ現代の時流に立たんとする程のものは一味の滋味がなくては叶うまい。其所が所謂粹なところだ。」

バトウ「粹とは何だ。孔雀の事かい。」

シヤントクレ「さう云へば、あの孔雀は、此の頃何をして居るか。」

勳鳥「あの尾で媚びてばかり居る。」

バトウ「孔雀の振舞は謙遜な心を殺す毒だ。」

シヤントクレ「毒とは、何の點か。」

バトウ「一舉一動皆毒だ。」

老母鶏(現れて)「流る、河に浮く泡は、河上に洗濯女が居るしるし」(蓋落ちる。)

シヤントクレ「乃公には其の泡らしいものだに見えないが、孔雀に災害がひそむで居るだらうか。」

バトウ(その邊を通るギネア豚を指しながら)「あの豚なども髓に。」

シヤントクレ「豚が仕うした。只の黄色なギネア豚に過ぎないではないか。」

ギネア豚(愠り聲をしてシヤントクレの言葉を訂正しながら)「黄色ぢやない。カーキ色

だ。』

シヤントクレ (パトウに) 『何。カーキだと。』

パトウ 『實に馬鹿らしい。又あそこには家鴨がよたよた行きおる。』

シヤントクレ (家鴨を見ながら) 『家鴨はただ水浴に行くのぢやないか。』

家鴨 (ゴツゴツした聲で) 『私の手桶は……』

シヤントクレ 『桶だと。桶が要るやうに糞澤になつたのか。はつは。』

パトウ 『生意氣な。』 (納屋の中から何か軌るやうな音きこえる。パトウ、ウ……とぼへる。すると)

時計 『クツクン。』

灰色の雌鶏 (かくれ場所から出て来て猫穴の方にはしり) 『御聲だ、今度は什麼しても御姿を一眼見るわ』 (と云つて矢庭に猫穴に頭を突つこむ。『あれ。あれ。又見損れたわ。』) (と云つて大聲をだし) 『も一度。鳴いて下さらないこと。』

シヤントクレ (此の物音に驚いて後ろに振り向き) 『何だ。』

灰色の雌鶏 (頭を猫穴につき込むだま絶望の聲で) 『お聲がないこと。』

鷓鴣 『半時の音を聞いてらあ。』

シヤントクレ (灰色の雌鶏の後ろに接近して急劇に) 『これ御前は什う云ふ譯で野に行かないのか。』

灰色の雌鶏 (狼狽て頭を振りむき) 『あれ。まあ。あれ。』

シヤントクレ 『お前は其の猫穴で何をして居た。』

灰色の雌鶏 (驚いて錯亂して) 『あのちよつと覗いて……』

シヤントクレ 『誰を覗いた。』

灰色の雌鶏 (愈々錯亂して) 『あの……』

シヤントクレ (嚴然と装つて) 『誰を覗いた。』

灰色の雌鳥 『あの……』

シヤントクレ 『自白なさい。』

灰色の雌鶏 (罪狀を許かれた女性の柔順な聲で) 『郭公様。』

シヤントクレ (驚いて) 『郭公? お前を愛して居るのか。何處に居るのだ。』

灰色の雌鶏 (臉をおろして沈むで居たが觀念した様な聲で) 『スキツツルと云ふ國の方よ。』

パトウ 『實に馬鹿々々しい。』

灰色の雌鶏 『あの方は哲學者さんよ。散歩をなさるのよ。』

シヤントクレ「彼は時計を愛して居る。」

灰色の雌鶏「さうなのよ。恰度カントの様に一定の時に散歩なさるのよ。」

シヤントクレ「何。何の様だ。」

灰色の雌鶏「カントの様よ。」

シヤントクレ「何。何だ。乃公の知らぬ間に……」

黝鳥「そら逃げるカント。」

灰色の雌鶏は走つて逃げる。

シヤントクレ「愛い奴だ。……何處でカントなど覺えたのだらう。」

パトウ「ギネア雌鶏どもから。」

シヤントクレ「ああ。あの老老のガアガア氣狂の様に喋舌る嘴の白い婆共からか。」

パトウ「一日消費して覺えたのだ。」

シヤントクレ「一日何處かに遊びに出たと云ふのか。」

パトウ「いや一日庭で懶けたのだ。」

シヤントクレ「庭で。庭の何處で。」

黝鳥「この小庭のあの隅で。」

パトウ「あの無氣味な古山高を冠つた藁人形の影で。」

シヤントクレ「案山子か。」

黝鳥「内證事には案山子の影だ。」

シヤントクレ「荒らかに」何。何だ。」

黝鳥「案山子のあの偽面が怖ろしさに、臆病な鳥供は皆逃げてしまふから、内證事には一番好い處。それを今まで氣附かいで……」

シヤントクレ「で、そこにはあのギネア婆供が集る？」

パトウ「鈍感的に」實に馬鹿々々しい。」

シヤントクレ「無思慮極まることだ。」

黝鳥「ギネア雌鶏の眞似をしながら」時は月曜ネエあなた……」

シヤントクレ「であの氣樂者の奴等は其處で何をするので。」

パトウ「ベチャベチャグワアグワア云ふばかり。第一七面鳥の野郎が威張た身體態をする
と、直に雛鶏供がそれを眞似ると云ふ始末。」

黝鳥「矢張ギネア雌鶏を口眞似ながら」五時か六時の其の頃で……」

シヤントクレ「何。夕方に。」

パトウ「いや。拂曉に。」

シヤントクレ「何？」

勳鳥「其の刻限は此の庭に誰も居らないお茶時で、庭師の爺やも朝酒時分だ。内證事には以て来い。」

シヤントクレ「何。何を云ふ。」

勳鳥「へい。全く左様然り。」

パトウ「貴様は喋るな。貴様も其の仲間ではないか。」

シヤントクレ「何。勳鳥も仲間？」

勳鳥「へい。私や仲間の愛嬌者。飾り者。」

パトウ「それから乃公の眼にも、折々は見つけることだが……」

シヤントクレ「何。何。お前のその眞鍮の襟の爲めに云うことがよく判らぬ。明白と云へ。」

パトウ「時には雌鶏が故意と足下を誘ひ出して……」

シヤントクレ「乃公を。」

パトウ「足下を。」

シヤントクレ「此の乃公を。」

パトウ「足下の嘴に媚の繩をかけて。」

シヤントクレ（激怒して）「此の乃公を。」

パトウ「でも浦若い雌鶏が眼のあたりにちらつくと、足下は直に恍惚となつて、分別もなくなる。」

勳鳥「それから一番美しいのを羽交絞……」（と云つてシヤントクレが雌鶏の周囲を恍惚まはる眞似をして）「乃公だよ」「乃公だよ」と云つては「コオ……コオ……」だから。」

シヤントクレ「諧謔にかけては此の勳鳥に敵は無い。」

勳鳥（まだシヤントクレの眞似をしながら）「閣下はそれから兩羽をセンチンタルにだらしとさせて、距は舞踏の半可眞似……」（此の刹那銃聲一發響く）……「は、いけすかない音。」

パトウ（頭を震つて起きあがり空中を嗅ぎまはしながら）「フー。又あのジュリアの鳥盗人が悪戯を始めたか。」

勳鳥「ホー。犬殿。あの音がお氣にめしたか。」

パトウ（耳朵を立て眼を輝かしながら）「左様。」（と云つたが突然自制して感傷的に）「否。」

否。」

鷗鳥『それは又仕うして。』

バトウ『おほかた、又可愛相に老鳥がやられたのだらう。氣の毒なことだ。』

鷗鳥『何だ涙を出しやがつて。足下は老耄れたのかい。リウマチにでもなつたのかい。』

バトウ『老耄れても居らねばリウマチスでも無い。乃公の身體の中には種々な犬の血が混じて居る。あの響を聞くと、獵犬の血はすぐ此の鼻を嗅ぎまはさせて、勇むて来るが、それと一所に飼犬の血が、鹿の死顔や、血まみれの羽交や兎の斷末寃を思ひださせて、聖者のやうに胸が悲みで張りさける。』(又一發の銃聲きこゆ)

シャントクレ『又。』

黄金色の雉子(突然壁の垣を越えて庭の中に落ち來り氣も狂ふばかりの驚怖の聲で)『私を匿して下さい。』

シャントクレ『何事だ。』

バトウ『黄金色な雉子だ。』

黄金色の雉子『貴方様があの御威勢あるシャントクレエル様。』

鷗鳥『雄鶏ばかりぢやない。乃公等にも御威勢が備つて居るんだい。』

黄金の雉子(其處此處とろろつきながら)『貴方がシャントクレエル様。御慈悲のシャントクレエル様。仕うぞお救ひ下さいませ。』

シャントクレ『乃公がシャントクレエルだ。安心せい。』(又一發の銃聲きたる。)

黄金色の雉子(驚いてとびあがり、シャントクレエルに身をよせかけて)『お慈悲。お救ひ下さい。』

シャントクレ『何と云ふ華洒な神経質な鳥だらう——これ黄金色の雉子。』

黄金色の雉子『一生懸命に飛んだので、もう呼吸が絶えさう。……』(と云ひながら氣絶する。)

鷗鳥『や、臉が白んでしまった。』

シャントクレ(片方の羽交で雉子の身を支へながら)『美麗な鳥もあるものだ。斯うして頸を垂れて咽喉羽毛の柔いのを惜しげもなく見せて。』(と云ひながら水飲桶のところへ連れ行き)『それ水だ。此の美しい羽毛に水をかけるのは惜しいやうだ。』(と云つて他の片方の羽交で水を振りかける)

黄金色の雉子(甦つて)『私、追はれて居る。匿して……』

鷗鳥『してその追つかけた野郎は(と云つて聲をひくめ)『こいつ面白い芝居だ。(再び聲を

あげ雉子にむかひ)馬鹿野郎は君をとり逃がして残念がつて居るだらう。』

黄金色の雉子『私驚きましたよ。小さな雲雀ばかり狙て居る獵師が、私を見るが早いか稲妻のようにキラリ、妾の羽の金色がチラツと見えるが早いかもう獵銃の先には煙が……すぐと犬が、憎らしい犬が(と云つてパトウの姿を見て)獵犬のことですよ。獵犬が追つかけて……(シヤントクレエルに)何卒私を匿して……』

シヤントクレ『困つた事には美し過ぎる。目立つ。何處に匿さう。美しい旅人。匿す術がない。危険いからおいそれと虹を匿すことが六ヶ敷いと同じこと。』

パトウ『あそこ。あの乃公の小屋と蜜蜂の巢のある椅子の影あそこに匿れなさい』(黄金の雉子その影に匿れたがまだ其の長い尾が現れて居る)『此の金の飾があまり長すぎる。乃公が技に寝て匿くさう。』(此の時獵犬のブリツファウ壁垣の上に現はれる。長い垂れた耳とふるえる牙)

パトウ(ブリツファウに向ひ何喰はぬ顔で)『や。今晚は。』

ブリツファウ(嗅ぎまはしながら)『フツン。良い匂がする。』

パトウ(その喰皿を示しながら)『おれの皿だ。初物野菜のスープがあるぞ。』

ブリツファウ(急いだ聲で)『君は雌雉子が逃げたのを見なかつたか。』

パトウ(ワザと驚いて考へる風をし)『雌の雉子?』

シヤントクレ(貴公子然とその邊を歩きながら)『英吉利紳士と云つた風采でブリツファウが立つて居るのは、中々印象的だ。』

パトウ『はて、雄の雉子なら見たやうだが。』

ブリツファウ『いや。慥に雌だつた。』

パトウ『雌なら鐵棕色だ。乃公の見たのは黄金色の慥か雄だつた。もう牧場の向うに行つてしまつた。』

ブリツファウ『金色のでも雌は雌だ。』

シヤントクレ(ブリツファウに近づき怪訝さうな顔をして)『金の羽根を持つた雌の雉子?』
ブリツファウ『たまには金の雌も居るものだ。』

シヤントクレとパトウ『斷じて居ない。』

鷓鴣『さあ。一つ獵りまはして有るかないかを探して見やう一同野獵の用意。クロロホルムを忘れるな。』

ブリツファウ『稀には金の雌も居る。特別の場合だが居る。乃公の御主人に雉子の學者だが、さういう特別の雉子の出るのは稀有の瑞祥だと。松鷄の群に混つて現れるさうだ。』

パトウ「フウ。其處雌が居るのか。」
ブリツファウ「居るとも。居るよ。」

シヤントクレ（稍氣烈たく足をドヂマヂしながら）「雌だ。雌の雉子だ。」

ブリツファウ「何でも雄の雉子が春着を美々しく装つて爛漫の春を迎へるのを見て、負けぬ氣になつて雌の先生立派な衣裝を拵へたのだと云ふことだ。」

勳鳥「ところでそいつが災難の因」

ブリツファウ「衣裝は美々しく装つたが、卵を産むだけり温めたりする方はそつちのけ。頓て其の脊に紫色が輝く金が輝く、莊美華麗な女傑となつて、青、赤、緑、黄とプリズムの光を總てつくして羽交を飾り、もとの灰色を處女心と一所にふり捨て、自由交際も御意のままとなる。氣輕な心に女性の徳とやらを到るところに振りまいて……」(などと云つて稍輕蔑の意味を以つて前足で黄金の雌雉子を描寫する)

シヤントクレ（冷淡らしく）「それからその雉子が何うなつたか詳しく話しては何うだ。」

ブリツファウ（驚いて）「お氣にかゝると見えますな。」

パトウ（側から）「そりやもう。」

シヤントクレ「とに角君の主人がとり逃がしたと云ふ雉子は。」

ブリツファウ「雌です。(と云つて急にやめてあたりを嗅ぎまはし) どうも……」

パトウ（急いで皿をつき出しながら）「匂は此の皿だよ。乃公の晝飯だ。」

ブリツファウ「しかし平常よりは餘程好い匂がするぞ。」

シヤントクレ（側を向いて）「あんなに鼻を歪めて嗅ぎまはすなどとは實に醜い。」

ブリツファウ（氣づいて又新たな話をしはじめ）「時に斯ういふことがあるのだが……」

勳鳥「甘さうに匂つて来るぞ。たまらぬ。食堂からだ。」

(遠くより呼笛鳴る)

シヤントクレ（口はやく）「君。主人が呼んで居る。」

ブリツファウ「チツ。左様なら」(去る)

シヤントクレ「とうく行つた。」

勳鳥（呼びながら）「ブリツファウ。」

シヤントクレ（黄金の雉子に向ひ）「黄金色の君。何うだれ。」

勳鳥（呼びながら）「ブリツファウ。一寸話し度い事がある。」ブリツファウの頭壁垣の上に現る。「何だ。」

勳鳥「氣を附けて見給へ。」

シヤントクレ（鷗鳥に低い聲で）「貴様は吾々の懸念を玩弄にするのか。」

鷗鳥（ブリツファウに）「君は大變なものを捨てたぞ。」

ブリツファウ「何を。」

鷗鳥「時間をさ。」

ブリツファウ（憤怒の冷笑をしながら）「ウ……」（と唸つて消える。）

シヤントクレ（暫くたつて壁石坂の彼方まで見おろす位置の籠に歸つた鷗鳥に向ひ）「行つてしまつたか。」

鷗鳥「殆んど見えない位遠方に行つた。」

シヤントクレ（パトウの小舎の方に近づき）「奥様。大丈夫ですよ。」

雌の雉子（犬小屋の戸口の處に現れ）「はい。私は。私は。あの犬が先刻申しました通り華美な虚榮の奴隷ではありますが血統には深い由緒のある森の雉子でありますよ。」

鷗鳥「ホー。乃公など詰らないぢやないか。」

雌の雉子「緑の影——それも太陽の光線が透く程に心地よく茂つた處に私の家庭があります。私の先祖は何處にもありません。ペルシャにも支那にもありませんが、何れが本統かは誰も知りませぬ。ただ私は東洋の緑の香の高い護謨の林の間に棲むこそ相應へ、決して荊棘

のなかを獵犬に追はれる爲めに生れたものではありませぬ。私こそは昔の神話とやらにありません。聖鳥か。それとも支那の鳳か。私が仕うして這麼さころに來たかは、歴史にも詳しくありません。私の好きな言ひ方をしますれば、コルニスに生れ。そこからゼーンの腕の上で運ばれて來たとして置ませう。私は全く純金づくめでありますよ。」

パトウ「で貴方は。」

雌の雉子「私は雉子であります。」

パトウ（丁寧な言葉で訂正して）「女性の雉子。」

雌の雉子「女性と云ふは只戴く紅の象徴で判りませう。が丁度紅玉の側に枯葉があると等しい古の女性の姿は、甚だ面白からぬことに思はれましたから遂に男性の輝く羽毛を盗み取りました。幸福の上に又幸福とやら、私は男性よりは餘程美しうなりました。此の今私が捲いて居ます黄金の装領は種々に折れて種々に輝き、綠玉の肩章は誠に高尚な風雅となりました。私は眞當に單純な衣類をあつめては此のやうに奇跡と思はれる程な美々しい服装を作りだしました。」

シヤントクレ「實に羨しい服装だ。慥に天下の美形である。」

パトウ「シヤントクレエルも流石に男装の女には戀をしないであらうが。」

黝鳥（再び籠の中からホップして出て来て）『どれ行つてギネアの婆様にでも黄金の鳥が此の庭に天降つたとても話してやらうか。婆さん魂消て歓迎の用意に狼狽するだらう。』
 シヤントクレ（雌雉子に向）『では奥様は丁度曙が生れるやうに東洋から、お出でなされたのだ。』

雌の雉子『私の生涯には小説よりも數奇をきはめた詩的な事件が澤山あります。東洋から來ましたもの、埃及を通つて來ました。』

パトウ（痛しげに）『さぞかし漂零落魄の辛い想ひもあつたのでせう。』

雌雉の子（シヤントクレに頸を種々にまげては襟の毛の燦爛と輝き變るを見せながら）『茲に二つの色別がありますが、それがお判りなの。此の二つは私獨得の色彩で、一つは曙一つは私の輝なのであります。樹影の姫君、林間の后としては女流探検家のやうに此の黄金色の髪飾を用ひます。私の判らない故郷……其の故郷を思ふ夢見るやうな懷郷病に病みやみ病み疲れて私は沼の岸を縫ふ枯れた菖蒲とカサカサと鳴る玉蟬花との間に家を定め、森に瞑想の消遙をなし、總ての葉の凋落し、すべての枝の冬枯れる晩秋の風を聞く時は……』

パトウ（心も亂れんばかりに同情して）『嘸かし氣狂はしく悲しくなることであらう。』

雌の雉子『丁度南の嵐に樹の枝が凄じう揺れるやうに、私の身體は震い戦き、震ひつゞけてとう／＼身も世も忘れて失心して仆れてしまふことも度々……』

シヤントクレ（暫くの間羽を垂れた儘で聽いて居たが、頓て、先刻黝鳥が擲掄した通りに雌の雉子の周圍を二三度廻り柔いやさしい聲で）『コオ、コオ……』（雌の雉子は雄鷄を凝視する。シヤントクレエル之に勇氣を得て更に雉子の周圍を週廻しながら）『コオ。コオ……』

雌の雉子『あの臆面もなく云はせて下さいませ。貴方のさうなさるのは……』

シヤントクレ（雉子の言をみぢかく遮り）『拙者が仕らすことが……』

雌の雉子『貴方がさうなさるのは眞當に愛嬌がお有りです。こと愛嬌は慥にお有りですが、私の胸にはすこしも差し響きませんの。』

シヤントクレ（赤い面をして）『奥様……』

雌の雉子『貴方の御心は熱く判つて居ますわ。貴方は名高い雄鷄の御身分、雌鷄達が嘴で羽毛を揃へるのも其の心は皆貴方故。貴方の御歌の間々にも貴方に戯れて戴きたいばかりまこととるける程に楽しい希望……その時貴方も躊躇はずお迎へなさるが、みんな短かい運命、ほんの刹那の夢結納もかかさずと戀しあふものは誰も誰も輕薄ですよ。』

シヤントクレ『しかし……』

雌の雉子「私は左様の輕薄は嫌い。私の趣味から申すれば、貴方はあんまり捌け過ぎていらつしやいます。」

シヤントクレ「捌け過ぎる？」

雌の雉子「はい。穢れていらつしやるわ。私が心を籠める唯一の雄鶏は必ずや質素で眞面目でなくては叶ひませぬ。」

シヤントクレ「しかし……」

雌の雉子「私は大勢が持て囃す雄鶏を愛するやうな平凡な女では、斷じてありません。」
シヤントクレ「奥様。そんなことはまあ可いとして、二人ですこし散歩でもしませうか。」

雌の雉子「はい。さう、友達として歩ませよう。」

シヤントクレ「庭を一周しませう。さあ私の羽交と組みあはせて。」

雌の雉子「此の邊の眺望を見せて下さいませ。」

シヤントクレ（雄鶏共の水飲桶の側にたちとどまり）「これは立派なものでせう。地は鐵で鍍金をしたもの、サイフォンの原理で組織されて居ます。此れを除いても鶏屋の屋根から厩の扉にいたるの間、總て皆高尚な星霜風雪に洒された古雅なものばかりです。」

鷓鴣（歸つて來ながら）「ギネアの婆は魂消て魂消て、魂消て居る眞最中。」

雌の雉子（周圍を眺めながらシヤントクレに）「貴方は茲で誰にも邪覽されず、誰にも怖れずお暮しなさるのですね。」

シヤントクレ「いや茲には何もありませぬ。主人が野菜家ですから。それに主人は非常な動物愛護家ですから、何の動物にも詩人から美しい名を假りて來ては、驢馬をミダスとか、牡犢をイオとか呼んで居ます。」

鷓鴣「丸で見世物の口上言ひにそつくりだ。」

雌の雉子（鷓鴣を指しながら）「あれは何。」

シヤントクレ「此の庭の滑稽家。ユーモリストだ。」

雌の雉子「彼は何をしますの。」

シヤントクレ「あいつ。忙がしい奴だ。」

雌の雉子「何を其處に忙がしがるの。」

シヤントクレ「一擧一動馬鹿に見られまいと思つて忙がしがつて居る。彼にとつては中々六々敷しい仕事ですよ。」

雌の雉子「そう。でもまあよく注目されないぢやありませんか。」（二人は後ろの方に行く）

黝鳥(雌の雉子の紅の胸を一寸見て)『此の豪華者の奥様の周圍は何尺……測つて見たまへ。腰のまはりが太いぞ。』

シヤントクレ(尙ほあちこちと逍遙しながら)『此れが乾草塚。これが古垣。私が聲張りあげて歌ふたびに、古垣は蜥蜴で生きてくるし、乾草塚も耳傾けるかと思はれる。私が平常歌うのは彼所、彼所から見れば地勢が繪圖の様だ。歌ひおはると彼處にあるあの皿から水を飲むのが私の癖。』

雌の雉子『貴方が歌ふ。それは大切なことなの。』

シヤントクレ(最も眞面目に)『最も重要なことです。』

雌の雉子『何うして。』

シヤントクレ『歌は私の生命です秘密であります。』

雌の雉子『其の秘密を何卒お聴かせ下さいませ。』

シヤントクレ(會話を他方に轉じやうとし束にして積み重ねてある薪を示しながら)『之が薪と云ふもの。』

雌の雉子『それでは皆が云ふとほり。矢張り私等の森に来て這麼盗みをしますのね貴方のお秘密と申ますのは是なの?』

シヤントクレ『さうです。奥様。』

雌の雉子『それぢや貴方も……』

シヤントクレ(後ろの壁垣の上に登り)『此處からは庭の全景が一眸のうちに眺められます。あの涯にあるのが雜司畑で、晩になると蛇の纏れて居るやうな木戸が閉ぢられます。』

雌の雉子『で、お庭と申すは是れ丈!』

シヤントクレ『之で庭を見終りました。』

雌の雉子『では貴方はあの雜司畑が此の世界の際涯だと思ひなの?』

シヤントクレ『さう。』

雌の雉子『では貴方は、南洋に飛ぶ鳥の大空や水平線の彼方のことは夢にもお思ひなさいないの?』

シヤントクレ『さう。』

雌の雉子『でも此の庭だけぢやあんまり貧乏らしいぢやありませんか。殺風景でせう。』

シヤントクレ『私は此の庭の富と豊穰と、そして這麼に澤山の不思議のあるのを一生費しても費しきれないと思つて居ます。』

雌の雉子『しかし之れでは永遠も同じことで單調では御座いませぬか。』

シャントクレ「何が單調でせう。太陽の照るもとで、總てのものが變化します。これ皆太陽のため、太陽はあらゆる現象を作ります。」

雌の雉子「太陽？。太陽ッて誰なの。」

シャントクレ「光。宇宙に普き善。御覽なさい。農夫の妻の手植の葵の花に二度と同じ紅なく、あの古靴も草鞋も皆美しく見えるではありませんか。あの農夫の仕事着と一所に懸つて居る藁搔は齒の間に青草を含むで趣味があり、隅にかけてある又把は乾草の野を夢みながら、腕白小僧の顔附をして居る。あの磁製の皿は逞しい女中に縁を缺かれたが、時々バトウが悪戯に難したる音楽の器械。あの木製の大きい皿は古めかしく靈がはいつて居ませう。あの周圍を蝶が旅行するのが、丁度南極探検に成功したやうな自慢。あれを一週するに約八十秒を費します。貴女に話す話の種は一々新でありませう。貴方お察しなさい。私は此の庭で多情多感の朝夕を送るのですよ。あの隅のは立派な庭蓆、植木鉢、見れば見る程恍惚とするでせう。殊に曙に咲く朝顔の美々しさは、あまり凝視めたため私の眼が斯麼に丸くなつたと云ふ有様ではありませんか。」

雌の雉子（考へた様な顔をして）「貴方のさうお仰るのを聴けば貴方にもちやんと心と云ふものが備つて居るやうですわ世のなかの生存競争の舞臺に出る心の芽生がありますよ。斯

麼壁垣に劃られた小さな世界で、壁垣の上には猫が晝寢をして居るなんて平和なものね。」

シャントクレ「何。鋭敏な洞察力があれば、世界の形勢は嗚呼のうちにある。虫けらの死には大なる悲劇の暗示がある。針の穴からも天空を覗き星の運行を観ることが出来ます。」

老母鶏（現れて）「天を知るものは井の底の水。」

シャントクレ（古籠の蓋の落ちるに先きだち黄金の雉子を老母鶏に紹介し）「母上。」

雌の雉子（丁寧に近いながら）「御機嫌はいかが。」

老母鶏（老獪らしく雌の雉子に對し臉を二三度動かして）「息子も立派な雄鶏になりましたな。」

雌の雉子「茲の庭では……御立派な御立派な雄鶏様でいらつしやいます。」

シャントクレ（バトウの方に行つて）「バトウ君、實に話せる女だね。第一流の女性だね。」

（外より喧き聲だんだん近づく）「やあ、雌鶏達が騒いでやつて来る。苛立つたギネア婆が先登だ。」

鷓鴣「今度はギネア婆の幕か。」

ギネア雌鶏（雌の雉子の方へ走り行き）「おやまあ。おやまあ。貴方は御立派ですこと。貴方にお知己になつて戴きに來ましたよ。」（大勢驚嘆の聲に満つ、雌の雉子は大勢にとり巻れ

る會話、叫び聲、鳴く聲。』

シヤントクレ（雌の雉子を側から眺めながら）『あの女の歩き様の雅かき、自由な高尙な蓮歩だね』と云つて雌鶏共を見『雌鶏等とは大違だ。』と云つて慍つた聲で『こら、雌鶏たち貴様等の足には腫物でもあるのか。卵のぬめつた上でも歩くやうな。下司だ。』

バトウ『あゝ。あれが證據。又雄鶏は惚れてしまつた。』

ギネア雌鶏（その皇子を雌の雉子に紹介しながら）『妾の息子のギネア雄であります。』

若いギネア雄（驚嘆の眼を以て雉子を見ながら）『貴方の鬚の華麗なことには感心しました。』

一羽の雌鶏（下劣な聲で）『牛酪の様な色よ。嫌だわ。』

シヤントクレ（雌鶏共の方に向ひ荒らかに）『お前等は既に鳥屋に這る時刻だ。』

一羽の雌鶏（ツンとして）『さあ。みんな行きませうよ。』

鷗鳥『皆梯をとびあがる。とびあがる。』

ギネア雌鶏（雌の雉子に）『お互に仲善くしませうね。親友になつて下さいよ。』

シヤントクレ（雌の雉子を側から見ながら）『あの贅澤な衣裳は慥に類を絶し群を抜いて居る。我家の雌鶏達は丸で長縮けて居る。』

雌の雉子（ギネア雌鶏に）『私は今夜は森に歸られはなりませんの。』

ギネア雌鶏（過度の失望にて）『そんなにお早く……』

此時遠方より銃聲聞こゆ。

バトウ『まだ獵をして居る。』

ギネア雌鶏『貴女は歸られませんか。』

シヤントクレ（熱心に）『さうだ。今夜は雉の奥様を捕虜として明朝まで留め置くことだ。』

雌の雉子『しかし今夜私の寝む處がありますか。』

バトウ（自分の犬小屋を指しながら）『さあ。あの部屋。あそこは汚れたことのない處士の部屋です。』

雌の雉子『私が？、屋根の下に眠りますの。』

バトウ（頑固に）『まあいゝからお這りなさい。』

雌の雉子『しかし貴方は、貴方はどうなさるの。』

バトウ『乃公は何うにでもなりますから。』

雌の雉子（我を折つて）『それでは一晩泊めて戴きます。』

ギネア雌鶏（痛ばしつた聲で）『明日。明日と云へば……』

皆のもの驚いて「何？」

若きギネア雄「明日はお母様の誕生日です。」

ギネア雌鶏（公然と）「明日は妾の誕生にあたりますので貴女もごうぞ御出で下さいまし。お粗末ですが蝸牛の會食でもいたしますから。あの孔雀さまも……」

シヤントクレ（梯子のぼり全員を見下しながら）「静に。静に。もう夕暮の煙が空に漲つた。」（と云ひ命令の調子で）「誰も皆平常の場所々に位置をとつたか。」

ギネア雌鶏（低い聲で雌の雉子に）「孔雀様もいらしやるの。葡萄の蔭で小さな集合をすることにしました。」

シヤントクレ「七面鳥も撞木についたか。」

ギネア雌鶏（同じく低聲で）「五時か六時の頃。」

シヤントクレ「家鴨どもも指定の場處をとつたか。」

ギネア雌鶏（同じく低聲で）「龜さんもお出になることにきまりましたのよ。」

雌の雉子「はあ……」

シヤントクレ（梯子の一番上の段にて）「誰も残らず屋根の下に這つたか。雌鶏等は残らず羽交の中にかくれたか。」

ギネア雌鶏（まだ明日の會に雌の雉子に出席を強むながら）「總の雌鶏が雄鶏を何處かに誘ひだして、邪覽させぬやうにして居ますの。」（と云ふて聲を大きくしてシヤントクレに）「既う皆、寢静まつたのよ。」

シヤントクレ「しかし——」

總のある雌鶏（鳥屋の中から顔を出して）「貴方私の許に来ないの。」

シヤントクレ「否。」

總の雌鶏（梯子の下にてシヤントクレを見あげながら）「おや、貴方は……」

シヤントクレ「何だ。」

雌の雉子「貴方は否などとお仰ると」

シヤントクレ（震へた聲で）「エエ……」

パトウ「フン。貴方は何處？」

シヤントクレ（尙ほ震へる聲で）「私が……」

パトウ「フン。雄鶏は日々に軟化する。にやけて来る。誰が奮發させるものは……」

老母鶏（現れて）「枯れたる葦を切りて笛となし、高調の歌を吹き込め」（と云つて又古籠の蓋落ちる）（夜はだんだん暗くなる。）

シヤントクレ（まだ躊躇した聲だ）『私は……』
一つの聲『さあ眠りませう。』

七面鳥（撞木の上で莊嚴に）『安き睡眠よ來れ。』

鷓鴣（籠の中で）『ホー。睡眠は到着だい。』

シヤントクレ（雌の雉子に向ひハツキリさ）『ではこれで伺ひませぬ。お眠みなさい。』

雌の雉子（稍さからつた氣味で）『お眠みなさい。』（と云つて風雅な步調で犬小屋にはいる）

バトウ（犬小屋の前に寝そべつて睡言を云ふ）『朝の曙の御空の色は眞赤な眞赤な、眞赤になるまで、ねんねこちゃんころねんねこいぬころ。』

ギネア雌鶏（寢ぼけ聲で）『五時か六時に……』

鷓鴣（同じく寢ぼけ聲で）『カルカル』と云つて無意識に頭をさげ『カー……ル。』

シヤントクレ（尙雉子の上で）『皆眠つたか。』（一羽迷ひ出た雛鳥を見つけ）『これ雛鳥！』

（と云つて其處に行き雛鳥を追ひ）『それ掴むぞ……』（と云つて雛鳥を羽交の下に追ひこみながら犬小屋の近くにより柔かな聲で）『奥様』

雌の雉子（藁のなかにすくみ眠さうに）『御用で御座いますの。』

シヤントクレ（暫くためらつたが）『何。何用はありません。』（と云つて再び雉子の上段へ

のぼる。)

雌の雉子『私睡れるか知らむ。』

バトウ（全く睡ぼけて）『……ね……ん……れ……こ……ちん……ろ。』

雌の雉子（睡むたさに不明瞭に）『始めて屋根の下に眠る。あ……漂浪の夢……趣味……』
シヤントクレ『睡るとせう』と云つて鳥屋に這る。睡ぼけた聲『臉を閉ぢて、睡やう睡やう。』

雌の雉子『……漂……浪……の……』（頭がだんだん垂れて藁の間に埋る。)

シヤントクレの聲（だんだんがすれて）『ね……ね……やう……』（静寂となる。二つの緑の
眼玉が突然壁の上で輝く。)

猫『乃公の眼を開けやう。』（間もなく乾草塚の上で二つの黄色の眼が輝く。)

一つの聲『乃公のも』（壁の上に又二つの黄色の眼輝く。)

他の一つの聲『乃公のも』（二つ黄色の眼又輝く。)

他の一つの聲『乃公のも。』

家禽等は全部熟睡。猫眼さむ。三疋の鼻、稍あつて土籠一疋、郭公の聲。

第一の聲「二つの緑の眼。」

猫（壁垣の上に立ち他の朧な幾個の眼を見ながら）「六個金の眼。」
第一の聲「壁垣の上か。」

猫「乾草の上だ。」（猫は又叫ぶ）「梟達！」

梟等「猫！」

黠鳥（目ざめて）「何だい。」

梟（猫に）「彼に對する大陰謀。」

猫「今夜？」

三疋の梟「今夜。ホッホッ。」

猫「ニヤ……。何處で。」

梟等「終の影で。ホッホ。」

猫「何時に。」

梟等「八時にホッホ。ポッポ。テッホ。」

第一の梟「空に暗い四を懸けまはる蝙蝠等……」

* * * * *

猫「蝙蝠等も仲間か？」

三疋の梟「味方だ。」

第一の梟「地獄から暗に穴を穿く土龍……」

猫「土龍も味方か？」

三疋の梟「仲間だ。」

猫（家の扉の方に走りより）「時計の郭公君。八時を確實知らせて呉れ。」

三疋の梟「あの郭公も味方か。」

猫「さうだ。それから。夜の夜番の梟。晝の鳥共の一部がこちらの味方とは愉快だね。」

七面鳥（納屋庭の一部の群集をひきつれて現れ來り）「やあ。丸い眼殿。今夜は茲で最後の決議をしゃう。皆は其處に御座るか。」

梟共「茲に居る。近所の丸い眼共は皆茲に揃つて居る。」

黠鳥「あの影。あれは何だらう。」

パトウ（睡りながら）「ウ……」

猫（犬の聲に驚く夜鳥等に）「何、犬の睡言だよ。」

シヤントクレ（鳥屋の中で）「コオ……」

梟等（驚いて）「やゝ。敵の聲が。」

七面鳥「構うことは無い。」

第一の聲「氣にかけるない。夜は眞の闇だ。眼さへ閉ぢれば乃公等は無くなるんだ。」（彼等は皆その輝く眼を閉づ。暗黒）

シヤントクレ（梯子の一番上に現れ来る。）

シヤントクレ（鷗鳥に）「鷗鳥。何か物音がするやうだ。」

鷗鳥「私が物音をさせるぢや。」

梟等（驚いて）「何を喋舌る。」（と鷗鳥が陰謀を雄鶏に告げはしないかとおそる。）

鷗鳥（シヤントクレに）「大謀反を企てる……」

シヤントクレ「何。」

鷗鳥「閣下に對して大謀反を……御用心あれ。」

シヤントクレ（再び鳥屋にはいり）「此の鷗鳥の悪戯よ。」

梟等「鳥屋に這つたか。」

鷗鳥「乃公はすこしも謀反の密告などはしなかつた。」

一疋の梟「では鷗鳥も味方だ。」

鷗鳥「否。乃公は觀照の態度を味う。見物ぢや。」

一疋の梟「夜の鳥は鷗鳥を害せぬぞ。此處で見て居れ。」

鷗鳥「暗黙は」

一疋の梟「恐怖」と云へば「猛爪」と答へる」

雌の雉子（犬小屋から頭を現しながら）「此の狭い屋根の下では呼吸が窒りさう。それから

（と云つて夜鳥の群集を見ながら）「おや」（と云つたまゝ犬小屋の後にかくれて見まもる。）

梟共「シツ。」（皆眼を閉ぢる。猫も閉ぢる。稍やあつて何事も起らぬので再び皆眼を開く）

「何。何でもなかつたのだ。さあやらう。」

不平の聲一同（夜鳥軍に對して追従するやうな媚びた聲で）「御成功を祈る。梟殿……」

梟「しかし貴殿等が我々の味方と云ふ理由は？」

七面鳥「乃公は彼奴を雛鳥時代から知つて居るから、雄鶏と崇めることが出来ぬ。」

家鴨「足に蹠が無い癖に飛石を拾つて涉るから彼奴大嫌ひだ。」

一羽の雛鳥「僕は這様に好い兒だから彼奴を嫌つてる。」

第二の雛鳥「彼奴いつでも板の間に家を書いて、僕には書かせぬから憎い。」

第三の雛鳥「彼奴何處でも一番高い處にあがつて、銅像の眞似するから僕撲つてやりた

い。

一疋の梟(一番大きな雛鳥に向ひ)「君は」

大きな雛鳥「僕も彼奴が氣に喰はぬ」

郭公(此の時八時を打ちはじめ)「クツクーン」

第一の梟「さあ。時。」

郭公「クツクーン」

第二の梟「やつつけやう。」

郭公「クツクーン」

第一の梟「あ。月が。」

郭公「クツクーン。」

第一の梟「紺の空を静かに登つて来る。」

郭公「クツクーン」

土龍(突然土をもぐつて現れ出て)「——あゝ。餘程暗かつた。」

第一の梟「やあ。土龍が来た。」

郭公「クツクーン」

土龍「乃公は彼奴を見たことが無いから大嫌ひだ。」

郭公「クツクーン」

土龍「やあ。郭公君が。君が彼奴に反対する理由は……」

郭公(最後を鳴らしながら)「彼奴は振子を捲かんでも鳴くからクツクーン。」

第一の梟「乃公等も憤慨に堪えぬ。」

第二の梟「あゝ急いで同勢を……」

(皆何處かへ行く静寂。)

雌の雉子(静々と犬小屋から出て来て)「私は何となく雄鶏殿が戀しくてならぬ。」幕。

ロスタンのシャントクレエルは四幕になつて居て。第一が『雌の雉子の夕暮』。第二幕が『雄鶏の朝』。第三幕が『ギネア雌鶏の誕生日』。最後の幕が『夜鷺の夜』となつて居ます。

第一幕は茲に掲げた通り、納屋の庭場に灰色の雌鶏や、總のある雌鶏や、黓鳥と云ふ正體の判らぬ鳥や、七面鳥や鳩やが集つて、此の納屋の庭で牛耳をとつて威張つて居る雄鶏シャントクレエルの歌には、什麼秘密があるのだらうかと云ふことを評判する。其處へ黄金色の美しい雌の雉子が獵犬に追はれて天降る。シャントクレエルが此の新來の美鳥に戀する。雌の雉子が納屋の庭場で夜をあかすことにして犬小屋に這ると、夜の八時に夜の鳥の動物が集つて、シャントクレエルに反旗をあげると云ふ筋になつて居ります。第二幕の『雄鶏の朝』では、幕があくと、青苔や羊齒類の生ひ茂つて居る山腹で、夜の鳥の梟の軍勢が集つて軍議をこらし、ギネア雌鶏の誕生日に猛惡な鬪鶏のホワイトバイルと云ふ荒々

しい鶏と、シャントクレエルをうまく衝突させて、シャントクレエルを亡いものにした
と云ふことに奸策をめぐらす。此の幕で又シャントクレエルは戀情のやるせなさに、遂に
雌の雉子は自分の歌の秘密、即ち自分の歌は毎朝太陽をのぼらせて、朗かな曙をつくりだす
靈妙な力があるのだと云ふ。雌の雉子も亦熱烈な戀情を訴へてシャントクレエルと永遠の
戀を契る。第三幕『ギネア雌鶏の誕生日』は即ち大なる波瀾の幕であつて、シャントクレ
エルと、猛惡な闘鶏ホワイトバイルとの蹴合が始まる。シャントクレエルは奮闘の結果ホ
イバイルを仆して勝利を得たのであるが、納屋の庭場の家禽家畜がすべて自分に對して反
つて居ると云ふことを深く悟つて、雌の雉子を伴つて森に逃れて別天地に新生活を營ま
う。抗心を持つと決心する。第四幕の『夜鶯の夜』の舞臺は既ら此の森林の夕闇になつて現れる。
戀の仲シャントクレエルと雌の雉子とが始めて嘴をつけて接吻をする。歡樂に酔ふ。森の
中は納屋の庭場とは大に趣を異にして居て、動物の種類も澤山あり、非常に愉快な夜會が
ひらかれる。中には蝦蟆の一群が現れて來て、茸(茸を蝦蟆の腰掛と原話で云つて居る)
の上に腰かけて、『乃公の身體は疣の浮彫だ。』などと云つて、シャントクレエルを驚かせる
ところもある。

第一幕にも出て居る通り雌の雉子は、始めからシャントクレエルを井中の蛙のやうに思

つて居たのであるから、シャントクレエルを戀する心は變らないでもシャントクレエルの
歌に太陽が出現させる力があるとは信じて居らぬ。がシャントクレエルは雛鶏の時代から
雄鶏の歌で夜が明けると云ふ信條を教へ込まれて居て、今まで一朝たりとも時刻を違へた
ことなく、必ず太陽を呼び起して居る。徹頭徹尾この靈妙な力が自分の聲に宿つて居て、
之が自分唯一の又最も貴重な生命だと思つて居るから、雌の雉子と同棲するやうになつて
も毎朝必ずこの勤を勵む。それが雌の雉子にとつては五月蠅くて、折角の楽しい夢を單調
なコケツコーコーに破られることが度々ある。で遂には二人相談の上コケツコーコーは一
日に只一度日出の時に限ると云ふ約束をしてしまつた。

約束はしたものの、シャントクレエルは雌の雉子に對する肉の戀のために、自己の天職
である毎朝の鶏鳴を一度にすると如何にも心にちつかぬところがある。當然シャント
クレエルには同時に二人の戀人があることになる。一つは『太陽』で一つは『雌の雉子』
である。

雌の雉子にとつては、シャントクレエルが夢寐の間にも『太陽』と云ふことにその心を領
せられて居ることが、深い強い嫉妬である、或る時シャントクレエルは朝顔の花のなかに嘴
をいれて、所謂耳を蔽ふて鈴を盗む流儀に、顔だけかくして、自分は太陽に何十回と云ふ

歌を捧げたいが、戀人の氣に觸るので止むを得ぬ、がこれからは毎朝戀人が睡て居る間に起きて、心が飽きたるまでに高調の歌を捧げ、最後の一つだけを戀人の耳邊で公明正大に歌ひたいと私語く。これを聞いた雌の雉子は愈々堪えられぬ。

シヤントクレエルが森にのがれた夜は、森のなかで澤山な動物が各自歡樂をつくしあつて、種々な音樂を合奏する。中にも夜鶯の歌調は哀音切々として、如何にも柔く、如何にもデリケートである。森の動物は皆恍惚としてしまふ。シヤントクレエルは之を聴き自分の歌とひきくらべて見て甚だ自信を損ずる。その夜は壯麗な此の森の大調和に驚嘆して、流石のシヤントクレエルも前後をわすれて、星に、螢に、兔に、啄木鳥に、あらゆる森の動物に歌の妙所を問ふ。問ふて居る間に、だんだん夜が白むてくる。もう曙に近い。此の時雌の雉子がそつときて、羽交でシヤントクレエルの頭を抱き、

『羽交ば外に張り出して居る心よ。』

と云つて、羽交の下にシヤントクレエルを抱き込むでしまふ。シヤントクレエルは戀人の此の身心も溶け去るやうな振舞に恍惚として肉の愛の極度に耽溺する。雌の雉子は半ばシヤントクレエルを甘い言葉で酔はし、半ばだんだん白むてくる東の空に早く朝日は現れよと云ふ。聽て日はあかあかと輝き出た。其の刹那に雌の雉子は羽交を擴げてシヤントク

レエルに向ひ、

『貴方の御歌がなくても、朝日は登つたでせう。朝日を止して妾の羽交に唯一の愛情を求めて下さい。』

と云ふ。シヤントクレエル呆然として自信を根底から破壊されて悲嘆するが聽て、

『幻影の死を眼前にしたものは死するか、或は更に強くなつて生存するばかり。』

だと云ふ。此の時納屋の庭の犬のバトウが、シヤントクレエルを尋ねて来て、つれて歸らうとする。シヤントクレエルは幻滅の心に淋さと決心とを覺えながらバトウと共に去る。

此の時突然雌の雉子が毘にかゝる。向ふの方からは獵師が来るやうな氣配がする。今まで茲に居た澤山の森の動物は一齊に獵師をおそれ逃げてかくれる。たゞ雌の雉子一羽だけが殘つて羽をはたはたさせる。

『妾も人間に捕えられて鋤や鍬やの置いてある納屋の隅に籠にでもいれられて、シヤントクレエル様の近くに居たい。』

と云ふ。バトウと一所に行くシヤントクレエルのコケツコーコーの聲はだんだんに遠ざかるばかりである。(朝鳥生)

大正三年十一月四日印刷
大正三年十一月七日發行

定價金拾錢

著者 加藤朝鳥

發行者 植竹喜四郎
東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地

印刷人 柴田杠一郎
東京市京橋區弓町十三番地

印刷所 千代田印刷株式會社
東京市京橋區弓町十三番地

不許
複製

編輯所

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

日月社編輯部

發行所

東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地
振替東京一二九五三・電話下谷三四一九

日月社

現代
百科
文庫

文藝
思潮
叢書

ポケット形美本
各冊金拾錢
郵稅貳錢

□第一編 小説父と母と娘

森田草平著

□第二編 脚本蠅(さそり)

真山青果著

□第三編 評論無用語

安倍能成著

□第四編 小説木枯

小宮豊隆著

□第五編 歌集灰の音

與謝野寛著

□第七編 思潮半獸主義

岩野泡鳴著

□第八編 評論藝人と藝術家

生田長江著

□第九編 小説三十三の死

素木しづ著

□第十編 小説杏の落ちる音

高濱虚子著

□第十一編 評論人間的文學

森田草平著

現代
百科
文庫

宗教叢書

ポケット形美本
全部五十冊
各冊金拾錢
郵稅貳錢

- 第一編 宗教入門 江部 鴨村 著
- 第二編 神道綱要 西川 光次郎 著
- 第三編 日蓮上人 眞山 青果 著
- 第四編 法然上人 伊藤 證信 著
- 第五編 カラマヅフ兄弟(上) ドストエフスキ―著 森田 草平 著
- 第六編 カラマヅフ兄弟(中) 同
- 第七編 カラマヅフ兄弟(下) 同
- 第八編 大聖釋尊 江部 鴨村 著

- 第九編 シヤクンタラ姫 森田 草平 著
- 第十編 反アシテ基キ督スト 生田 長江チエ 譯著
- 第十一編 エレンケイ 平塚 明子 著
- 第十二編 道元禪師 青森 微風 著
- 第十三編 シヨッペンハウエル 岩野 清子 著
- 第十四編 王陽明 佐久 節 著
- 第十五編 トルストイの宗教 橋田 東聲 著
- 第十六編 ニーチェ 小宮 豊隆 著

□第十七編 高僧と母 江部鴨村著
□第十八編 親鸞聖人 安藤枯山著
□第十九編 オーガステン 小宮豐隆著
□第二十編 クリスト傳 中村古峽著
□第二十一編 天理教評論 和田對白著
□第二十二編 バイフル物語 中村古峽著
□第二十三編 蓮如上人 安藤枯山著
□第二十四編 弘法大師 青森微風著

□第二十五編 マホメット 眞山青果著
□第二十六編 カーライルの宗教 淺海琴一著
□第二十七編 俳聖芭蕉 岡本默骨著
□第二十八編 宗教新話 堺利彦著
□第二十九編 ワイルド獄中記 生田長江著
□第三十編 王舍城の悲劇 梅原眞隆著
□第三十一編 孔子の宗教 宇野哲人著
□第三十二編 心理學的宗教觀 福來友吉著

- 第三十三編 續高僧と母 江部鴨村著
- 第三十四編 サボナロラ 栗原古城著
- 第三十五編 スピノザの宗教觀 安倍能成著
- 第三十六編 教徒見たるて天理教 廣池千九郎著
- 第三十七編 起信論綱要 笈潮著
- 第三十八編 禪學入門 江部鴨村著
- 第三十九編 立正安國論略解 森田一能著
- 第四十編 救世軍 西川光次郎著

- 第四十一編 金光教 和泉乙三著
- 第四十二編 自由基督教 内ヶ崎作三郎著
- 第四十三編 セント・フランシス 東新著
- 第四十四編 眞言秘密 小林雨峯著
- 第四十五編 正岡子規 高濱虛子著
- 第四十六編 教界思潮評論 小笠原白洞著
- 第四十七編 新神秘主義 ビョルクマン京極逸藏譯著
- 第四十八編 社會問題と宗教 安部磯雄著

□第四十九編 ルツソー評傳 橋田東聲著
 □第五十編 近代思潮と宗教 中村古峽著

現代百科文庫

梗概叢書

ポケット形美本
 各冊金拾錢
 郵稅貳錢

□第一編 神曲 森田草平譯編
 □第二編 ベルアミー 徳田秋聲譯編
 □第三編 懺悔録 生田長江譯編
 □第四編 マダム・ボヴァリー 相馬御風譯編
 □第五編 死の勝利 水之上齊譯編

□第六編 英雄崇拜論

中村古峡 譯編

□第七編 ドリッサロメグ

相馬泰三 譯編

□第八編 女の一生

廣津和郎 譯編

□第九編 春の目ざめ

生田長江 譯編

□第十編 武器と人
ウオーレン夫人の職業

福永挽歌 譯編

□第十一編 森林生活

生田長江 譯編

□第十二編 ボオラ(ヒネロ作)
シヤント・クレール(ロスタン作)

加藤朝鳥 譯編

□第十三編 アントニーとクレオパトラ
シーザー

シエークスピア 譯編
永代静雄 譯編

□第十四編 オルレアンの少女
ウイルヘルム・テル

水の上 齊 譯編

□第十五編 イリアツド及
オデツセー

篠田錦策 譯編

□第十七編 アントニーの誘惑

生田長江 譯編

□第十九編 フアウスト

森田草平 譯編

小宮豊隆氏著（既刊）

反響叢書 第一編 演劇評論

四六版四百五十頁 定價金壹圓 郵税八錢

藝術界の革命 新劇壇の權威

新しい劇は輸入された。が、其の研究は俳優に於ても、舞臺監督に於ても、乃至批評家に於ても、極めて皮膚的な外面的な部分に止まつて居る。これに對して眞に根本的な内面的な解釋を下して、劇の核心から革命を齎した、若しくは齎さうとして居るものはわが小宮豊隆氏である。此の意味に於て、氏は實に新しい劇壇に於ける第一人者である。氏は又同じく根本的な觀方から歌舞伎劇の中にも新しい生命を見出さうとした。斯くの如くにして操人形から起つた歌舞伎劇は、面目を新にして現代に生れたので有る。今此の時代を劃した批評家の、時代を劃した劇評を聚めて世に問ふも、強ち徒爾では有るまい。氏の劇評が如何に人生の大問題に觸れると共に微妙な繊細な點をも逸さないかは、直接本書について知られたい。

編輯所 東京市本郷 日社編輯部

演劇評論内容

第一

歌舞伎劇に於ける 作と人と

- 中村吉右衛門論 末吉のおあさ 徳子の梅ヶ枝 「野崎村」 「渡海屋」 「吃又」 「清玄」 「吉田屋」 「勸進帳」の比較 其他數編

第二

翻譯劇に於ける 作と人と

- 「寂しき人々」ハuppptomann 「フアウスト」ゲーテ 鴨……………イブセン 「モンナ・ワナナ」…………… 「エレクトラ」…………… ……ホーフマン・スタール 「夜の宿」……………ゴリキ 「サロメ」……………ワイルド 「オセロ」……………シエーキスピア 「武器と人と」シヨオ 其他數編

第三

劇評斷片

- 女優について 舞臺美術について 坪内博士の「浦島」 坪内博士の 「お夏狂らん」 斷片一 斷片二 斷片三 斷片四 斷片五

發行所 東京市本郷 日社編輯部



平塚明氏著 (近刊)

反響叢書
第二編

現代と婦人の生活

四六版三百頁
定價金壹圓
郵稅 八錢

實生の在窮 一統の活

あらゆる意味に於てわれらは平等でなければならぬ。わが平塚明子女史はその著「扇ある窓口より」に於て「元始女性は太陽であつた。真正の人であつた。今女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く病人のやうな蒼白い顔の月である。」と叫んだ。平等の理想は血の力をかりて現實となり、痛烈なる生活欲求は最深最奥の意志力を以てそこに精花を花咲く。女史はこれを自己の内部に求め、外部の社會に慮りて、常にたへざる苦闘を自らの生活の上に敢てせんとする最も忠實なる生活者である。女史が周到なる注意と、明敏なる頭腦とを以て各方面に放つた批判は、今雄渾なる筆致を以てこゝに一卷の書をなしたのである。眞摯なる讀書子の座右にすゝめる。

編輯部 東京本郷元町 二の四十七 日社編輯部

終

